

## 福岡教育大学書道科所蔵書跡目録解題(六) 日本書跡(3) 補遺

The explanatory notes on Fukuoka educational college SHODO course's  
collection of classical sho-calligraphy's catalogue VI.  
JAPAN handwriting calligraphy (3)  
Addendum

福岡教育大学美術教育講座書道分野

(平成28年9月30日受理)

### 前言

本学書道分野が収蔵する書跡の、成立・歴史的経緯・書跡の現状及び書学におけるこれらの活用意義等について明らかにしてきた本研究も、今回をもって完結する。

今回は、特に、「書跡目録解題(五)」までに収載できなかった書跡をその研究対象とした。整理にあたっては従前の作業と大きな変更点はないが、作品の尺寸記録などの現況調査及び、収蔵作品全体にわたっての再確認に手間取り、作品研究時間が圧迫されてしまった。その大任をこなしてくれたのは、本学大学院教育科学専攻(美術教育コース書道分野)所属:日高拓哉、福岡千波、江頭史実、王国梁、山浦和香の院生5名である。また、研究段階において、本学卒業の福元志津佳、吉村春香二氏の協力を得て脱稿するに至った。ここに感謝の意を表したい。

縁あって本学に収蔵されることとなった書作品の全貌は、本研究においてほぼ明らかにされたが、今後、この解題を手掛かりとして後学の勉学に益することを願うものである。不十分な点もあろうかと思うが、その点は、諸賢のご指導をお願いするところである。(小原俊樹記)

### 凡例

1. 本編では、「書跡目録解題(四)日本の書跡(1)」,「同(2)」において収録することができなかった日本の書跡(「日書71~84」)及び、未整理であったものを「補遺」として配列し、論じた。
2. 作品名は、本学所蔵備品名及び箱書表示等を参考としたが、新たな名称を充てたものもある(例:補遺3 西川萱南二曲一双屏風)。また、欄外には、所蔵備品名や備品番号などを記している。
3. 本編の構成は、基本的に、解説本文、所蔵作品全体の写真(軸及び額の大きさは、その外寸を表示)、部分図版、比較図版及び、欄外注釈とからなっている。
4. 解説本文では、作品の書者、書字されている文章等に加え、その書格及び特徴について諸著を参照しながら、考察した内容をあげている。また、書学習上の資料としての価値等についても論じている。
5. 原則として、本文、欄外注ともに、新字体によって表記したが、引用文の一部については、原文を尊重する立場から旧字体・異体字等に拠ったところもある。
6. 他文献の引用においては、書名は『 』で示し、書き下しを心掛けたが、解説の都合上、原文のまま引用し、その大意を記したところもある。
7. 欄外注では、所蔵備品情報の他、著録引用に関する事項、登場人物の補足説明等、本文で述べられなかった点を補い、充実を図った。
8. 各書跡の責任担当者名は、本文の最後に< >で示した。

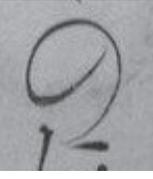
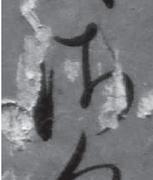
## 目次

日書71	短冊「ちりいでて」	33
日書72	雲華上人画賛	34
日書73	亀井南冥五言絶句	35
日書74	亀井南冥一行書	35
日書75	亀井南冥二行書軸	36
日書76	亀井大壯一行書軸	37
日書77	亀井暘洲二行書軸	37
日書78	広瀬旭荘富士詩画	38
日書79	広瀬青邨行草書軸	39
日書80	大田垣蓮月短冊「むれがめの」	40
日書81	頼杏坪五言絶句	41
日書82	中林梧竹行草書二行軸	42
日書83	中林梧竹「歳春」	42
日書84	比田井天来「質実剛健」	43
補遺 1	龍門道人題寶満山	44
補遺 2	西川萱南行草書軸	45
補遺 3	西川萱南二曲一双屏風	46
補遺 4	西川萱南臨上京題壁	47
補遺 5	周長応草書七夕詩軸	48
補遺 6	橋本関雪六曲屏風	49
補遺 7	平尾鴻雲「不忘敬」	50
補遺 8	行草書軸	51
補遺 9	豪潮「朝顔」	52
補遺10	書状八通	53
補遺11	費隠和尚偈	55
補遺12	木庵性瑫一行書	56
補遺13	日下部鳴鶴「克忠克孝」	57
補遺14	日下部鳴鶴「惟信惟義」	58
補遺15	蘇東坡書表忠觀碑	59
補遺16	魏高貞碑原石旧拓剪装本	60
補遺17	唐三藏聖教序碑（同州聖教序碑）	61
補遺18	唐馮本紀孝碑剪装本	62
補遺19	顔魯公三表真蹟拓帖	64
主要参考文献一覧		65

日書71 <sup>たんざく</sup>短冊 「ちりいでて」

クE131  
額装

本所蔵品の筆者に関しては、記録されていないが、書きぶりに関しては、大隈言道の書風と似た文字がみられる。（下掲の図参照）

	本短冊	本学所蔵の言道作品	比較・考察
「ちりいでて」	①  「ちりいでて」	②  日書 63 ①参照	①②ともに、連綿している最初の2文字は、厚みのある線質で書かれている。また、「いでて」の部分は、使用されている仮名が共通しているところも近似している。
「の」	③ 	④  日書 63 ③参照	③④ともに、始筆の方向、柔らかさのある回転、左の空間の広さなど近似している。
「な」	⑤ 	⑥  日書 56 参照	⑤⑥ともに、3筆目が右横に向かい、強調して書かれている。また、4筆目の結びに関しても、2筆目に近づけて書かれているのが近似している。
「佐」	⑦ 	⑧  日書 63 ②参照	⑦⑧ともに、1筆目は太く書かれ、2筆目の書き出しの角度も近似している。折り返し部分の画の連続も近似している。

本額は、縦 135.5cm×横 44cm である。短冊の大きさは、縦 35.5cm×横 6cm。シミや虫食いの跡がみられ、ひどく傷んでいる。

釈文は、「ちりいで、／さ(佐)け(介)て(豆)う□□□／□□□□□／花の時の(乃)み(三)／お(於)も(无)ふな□□□」である。

この書は、線の太細の変化が目を引く作である。また、それに加え、墨量の変化があることで作品を立体的に見せている。 〈福岡〉



## 日書72 うんげしやうにん がさん 雲華上人 画讃

クE255  
軸装

①ひがしほんが  
んじがくりょう  
1665年に京都  
府京都市下京区  
烏丸七条にある  
真宗大谷派の本  
山の東本願寺寺  
内に寺院子弟教  
育を目的として  
創設した学寮で  
ある。

②まんとくじ  
江戸時代、時宗  
の尼寺であり、  
鎌倉の東慶寺と  
縁切寺として著  
名であった。男  
女差別が厳し  
かった当時にあ  
って、不法な夫  
から妻を救済す  
るといふ縁切り  
の特権が認め  
られた。

③たのむらちく  
でん  
(1777~1835)  
江戸時代後期の  
南画(文人画)家。

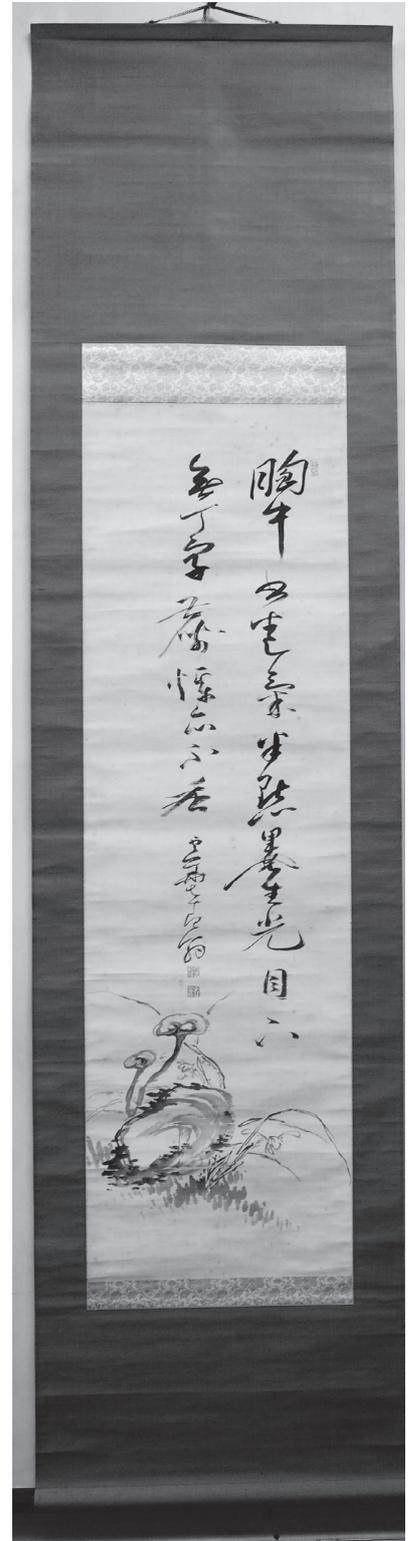
雲華上人(安永二年:1773~嘉永三年:1850年)は江戸後期の真宗の僧。東本願寺学寮<sup>①</sup>の講師で、詩文と書画に優れ、蘭の絵で有名。豊後国(大分県)満徳寺<sup>②</sup>に生まれる。皆往院鳳嶺に才能を見いだされ、寛政三年(1791)養子となり豊前国(大分県)正行寺に入る。同年東本願寺の学寮に入り、文政二年(1819)擬講に、同四年嗣講に、天保五年(1834)講師に昇進した。弘化四年(1847)に能登(石川県の能登半島北部位置鳳珠郡の町)の異義者頓成の教諭に当たった。頼山陽や田能村竹田<sup>③</sup>などと親交があった。幅広い分野で活躍した。著書に『帰名字訓講弁』『浄土論講義』などがある。

本軸の大きさは、縦191cm×横46.5cmで、紙本部分は、縦113cm×横33.5cm。引首印は「□風流(白文)」(縦2.0cm×横0.8cm)、落款印は共に白文で、1.5cm角である。印の積文は上が「大含印信」、下が「雲華」である。本文の積文は、「胸中書卷気/半點墨生光/目下無丁字/塵慄亦不香/雲華七十四翁」である。

箱書きには「雲華上人画讃 絹本豎物」と記されている。作品下部には雲華上人が得意とした蘭の絵が描かれている。

現在、正行寺では、毎年4月の第2日曜日に「雲華まつり」を行い、上人の墨跡や墨蘭画を展覧して遺徳を偲んでいる。仏学の大家としてだけでなく、文学や絵画をはじめとする様々な文事に才能を発揮し、多くの僧俗と宗派の垣根を越えて実り豊かな交流を実現した雲華上人の魅力が、今改めて評価されることを願ってやまない。(湯谷祐三『雲華上人の魅力を再評価したいー多くの詩作と墨蘭画を残す』中外日報 2014年 参照)

〈王〉



日書73 <sup>かめいなんめい ごんぜっく</sup> 亀井南冥 五言絶句

クE217  
軸装

①さわらぐんめいのはまうら  
現在の福岡市西区姪の浜三丁目  
の北部。

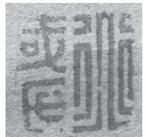
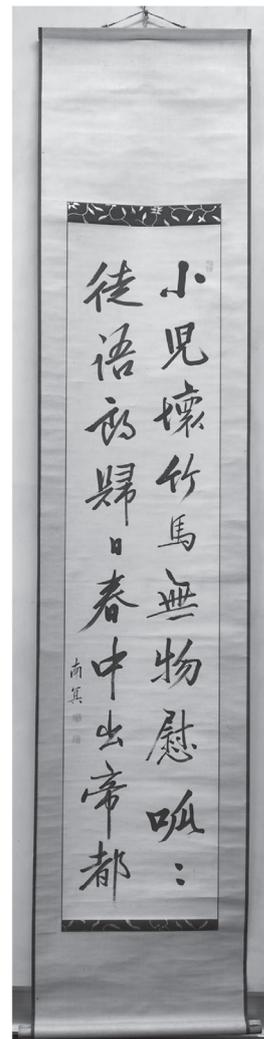
②前刊目録解題  
(五) 日書 39 参  
照。

③前刊目録解題  
(五) 日書 39 参  
照。

④前刊目録解題  
(五) 日書 39 参  
照。

本軸は亀井南冥（寛保三年：1743～文化十一年：1814）の書である。江戸時代中期の福岡県黒田藩の儒医、書家であり、詩文の名も高い。筑前福岡早良郡姪浜浦<sup>①</sup>に生まれる。名は魯，字は道濟または道載，通称は主水，号は南冥，のちに南冥と改める。別号に信夫翁，狂念居士，菴楼がある。永富朝陽<sup>②</sup>の門人である。朝陽が著した『囊語』の跋文を書き，朝陽が東海において名声を得て広く流布されると同時に，南冥の名もその能力を識者に認められた。南冥は，福岡唐人町医業のかたわら蜚英館<sup>③</sup>を興して儒学を講じた。藩の甘棠館<sup>④</sup>の祭酒となると，南冥の詩才は西海第一と称せられ，徂徠学復興の有力な指導者となった。なお，人物の詳細は前刊目録解題（五）27頁，日書39を参照していただきたい。

釈文は「小兒壞竹馬無物慰呱々／徒語朗歸日春中出帝都／南冥」である。本軸の大きさは，縦186cm×横39.5cmで，紙本部分は，縦128cm×横28.5cm。引首印は「□萬支<sup>紅</sup>（朱文）」（縦2.4cm×横1.2cm），落款印は「亀井魯印（白文）」（縦1.7cm×横1.7cm），「道<sup>載</sup>臣（朱文）」（縦1.7cm×横1.7cm）が押捺されている。軸箱には「南冥亀井先生五言絶句」と書かれている。行書を中心としながらも，所々草体を交え，日書39と類似する書きぶりであり，王羲之風の書法で書かれている。  
（江頭）



日書74 <sup>かめいなんめい いちぎょうしょ</sup> 亀井南冥 一行書

クE115  
軸装

本軸は亀井南冥（寛保三年：1743～文化十一年：1814）の書で，釈文は「天地之大徳曰生」である。『經書大講 第八卷』によると，「天地の徳」とは，「萬物を生み出し，また萬物を護つて其の發展を助けて行くといふ上に於て現はれて居る」ものである。本軸の大きさは，縦170cm×横32.2cmで，紙本部分は，縦121cm×横27.3cm。引首印は「白髮書生（白文）」（縦3.0cm×横2.0cm），落款印は「亀井魯印（白文）」（縦2.5cm×横2.5cm），「道載（朱文）」（縦2.5cm×横2.5cm）が押捺されている。この引首印と落款印二顆の組み合わせは日書40，日書41と同様であるが，押捺の状態はやや異なっている。軸裏には，「亀井道載先生書一行物 周易繫辭傳句 道載号南冥福岡人」と書かれている。軸先は片方欠けている。

南冥の書は，本学にはこの日書73，日書74を含め，七点の作品がある。  
（江頭）



## 日書75 かめいなんめい にぎょうしよじく 亀井南冥 二行書軸

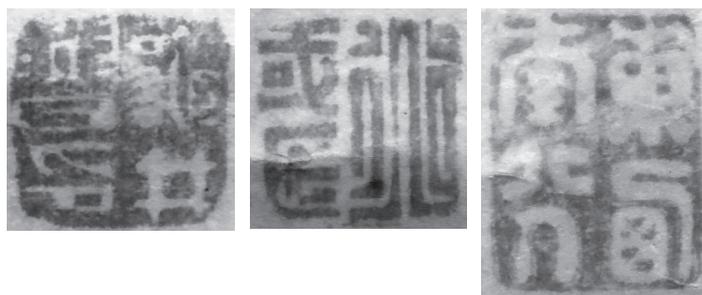
クE48  
軸装

本所蔵品の筆者である亀井南冥については、前刊「目録解題(五)」日書39を参照していただき、ここでは亀井家の発祥について紹介したい。

福岡県の西郊周船寺より南へ数キロ奥まったあたりに高祖山がある。この山は戦国時代に原田氏の居城となった山城であるが、原田氏は豊臣秀吉の九州平定に際し、島津方にくみしたため、秀吉の勘気をこうむり、肥後の加藤清正の与力となり、のち故あって唐津に寄客となり、島原の乱に軍功あって江戸におもむき、結局会津保科家に仕えることとなる。原田氏が高祖を離れるにあたり、多くの家臣はその山麓一帯に居残り、主として農に従事することとなった。その中の一家に三島家があり、怡土郡三島の里に住して代々里正をつとめていた。教円、俗称新八の時に至り、大原氏を娶って四男二女をもうけるが、その末子徳因がやがて南冥の父となるのである。教円は幼にして家を継いだため、亀井某なるものが代って家政を視、教円が成長するや、ことごとく田圃を記録してこれに授け、いささかも私心をはさまなかった。この義に感じて徳因は三島姓を捨てて亀井姓を名のるに至るのである。(『亀井南冥・亀井昭陽』より引用)

このようにして始まった亀井家の発展は南冥の代にとどまらないが、南冥以後の亀井家に関しては、前刊「目録解題(五)」日書50に掲載した亀井家系図を参照していただきたい。

本軸は、縦182cm×横38.5cm、紙面部分は、縦106.5cm×横27.5cmである。引首印は縦2.1cm×横1.6cmで「東西南北人(白文)」、落款印は縦1.6cm×横1.6cm「亀井魯印(白文)」、縦1.7cm×横1.7cm「道哉氏(朱文)」が押捺されている。

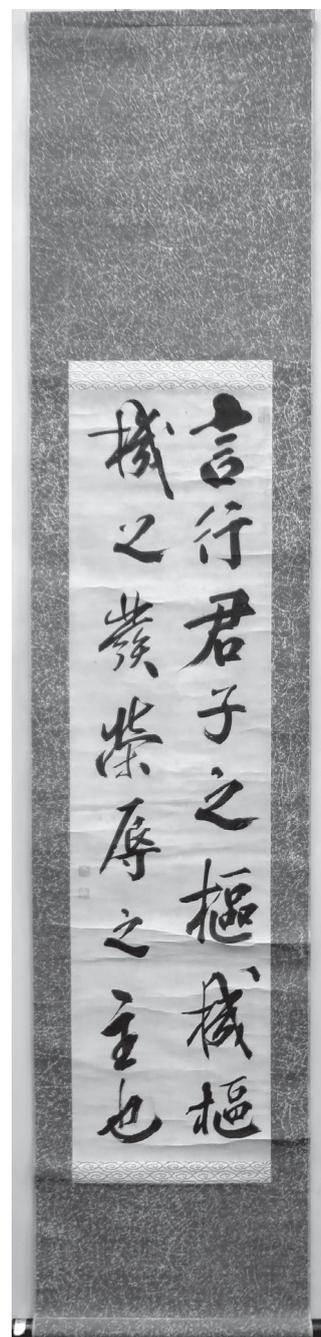


釈文に関しては以下の通りである。

言行君子之樞(樞)機(樞)

機之發(發)榮(榮)辱之主也

これは『易経』(繫辞上傳)のなかの「言行、君子之樞機。樞機之發、榮辱之主也。(言行は、君子の枢機なり。枢機の発するは、榮辱の主なり。)」という言葉で、「ことばと行動とは、君子にとっての枢機(もっとも肝心かなめのもの)である。だからその枢機の発するそのときこそが榮辱の帰趨する根本となるものである。」(『易経 下』新釈漢文大系第63巻、明治書院)という意味である。 (日高)



日書76 <sup>かめ い たいそう いちぎょうしよじく</sup> 亀井大壮 一行書軸

クE246  
軸装

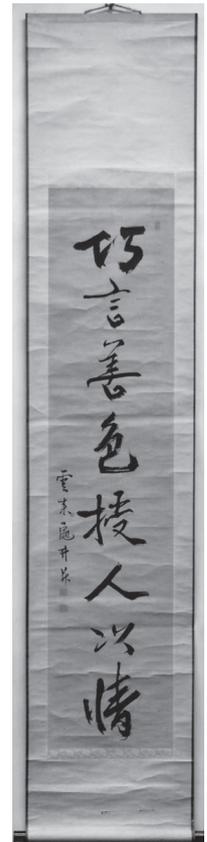
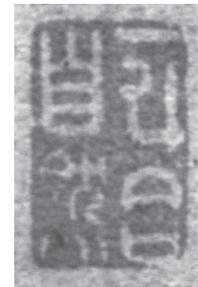
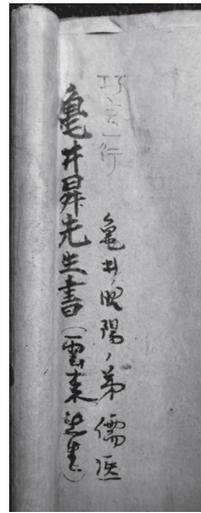
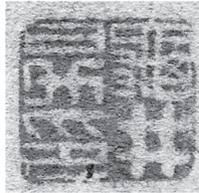
亀井大壮は、諱は昇，号は雲來，通称は昇二郎であり，大壮は字である。大壮を含め，父の南冥，兄の昭陽，叔父の曇栄，弟の大年の5人を「亀井の五亀」と呼んだ。

本軸は，縦 180cm×横 37cm，紙面部分は，縦 123cm×横 27.5cm で，積文は以下の通りである。

巧言善色授人以情

雲來亀井昇

引首印は縦 1.7cm×横 1.0cm で「一斗合自然（白文）」，落款印は上下ともに縦 1.4cm×横 1.7cm で「亀井昇印（白文）」，「大壮父（白文）」が押捺されている。また，軸裏には「亀井昇先生書／亀井昭陽ノ弟儒医（雲來先生）」と書かれている。 〈日高〉



日書77 <sup>かめ い ようしゅう に ぎょうしよじく</sup> 亀井陽洲 二行書軸

クE113  
軸装

①たかばおさむ (1831~1891)  
眼科医・高場正山の娘として博多瓦町（現・博多区祇園町付近）に生まれた乱は，学問を陽洲に学び「亀門の四天王」と呼ばれた。

亀井陽洲（文化五年：1808～明治九年：1876）は昭陽の次男で，字は鐵，通称は鐵次郎，陽洲と号した。幕末福岡藩勤皇の志士で陽洲に学んだ者は多く，南冥・昭陽期に劣らぬ数多くの文人を輩出した。中でも特に有名な人物が女傑・高場乱<sup>①</sup>である。

本軸は，縦 172.5cm×横 43cm，紙面部分は，縦 97cm×横 28.5cm で，積文は以下の通りである。

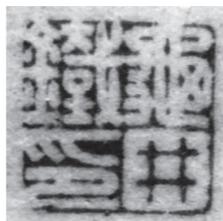
對(対)酒梅偕笑醉(醉)来柳亦眠

牀(床)頭筭(算)詩債且償四之篇

陽洲

引首印は縦 2.3cm×横 1.1cm で「攸好徳（白文）」，落款印は縦 1.7cm×横 1.5cm 「亀井鐵印（朱白相間印，「井」字のみ朱文）」，縦 1.7cm×横 1.6cm 「革卿（朱文）」が押捺されている。

引首印の「攸好徳（このむところはとく）」は，道德を守り，正しい行いをする事の意である。 〈日高〉



## 日書78 ひろせきよくそう ふざんしが 広瀬旭荘 富山詩画

クE242  
軸装

①かんちゃざん  
(1748~1827)  
江戸時代後期の  
儒学者・漢詩人。  
諱は晋帥。字は  
礼卿。通称は太  
伸・太中。幼名  
は喜太郎、百助。  
広島県福山市神  
辺町の出身。

②日書 79 参照。

③ゆえつ  
(1821~1906)  
中国、清末の古  
典学者、文学者。  
字は藤甫、曲園  
と号する。浙江  
省徳清県の人。  
旭荘に「東国  
詩人の冠」と評  
せられた。

広瀬旭荘（文化四年：1807～文久三年：1863）は江戸時代後期の儒学者、漢詩人である。

通称は謙吉，名は謙，字は吉甫，号は秋村・旭荘・梅墩。大分で生まれた。広瀬淡窓の弟。亀井昭陽，萱茶山①らにまなぶ。兄の私塾咸宜園②を運営したのち各地を歴遊。詩学をもって知られ，感情の起伏の激しい，才気横溢した詩を多く残している。文久元年，帰郷して雪来館を創立するが，翌年，摂津池田（大阪府）に移住した。

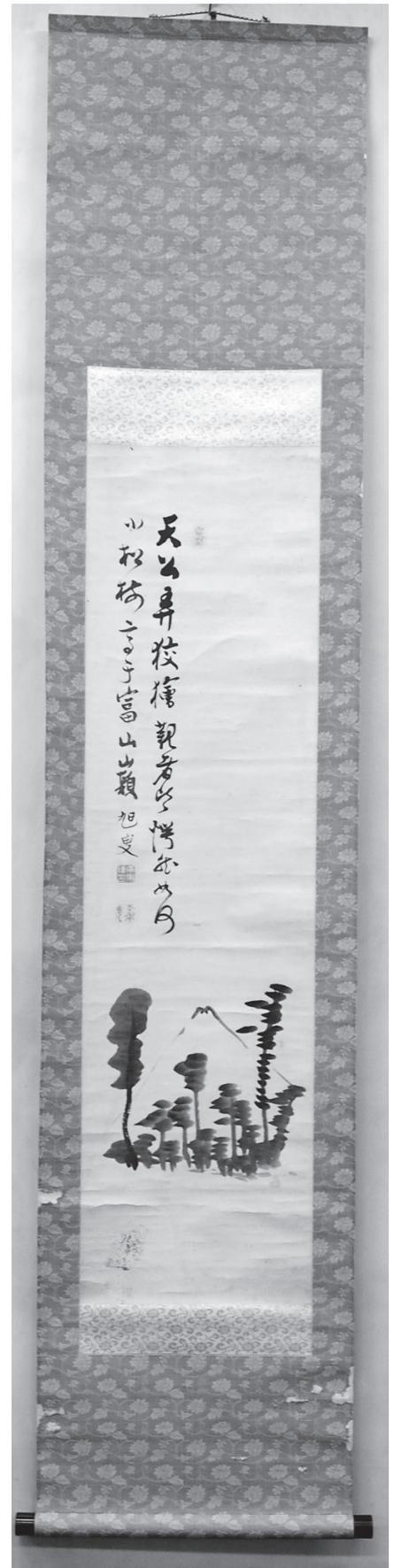
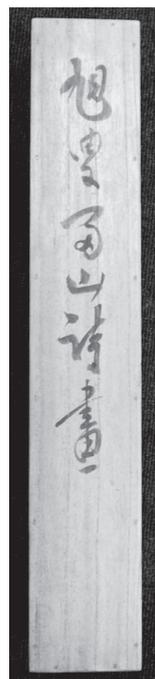
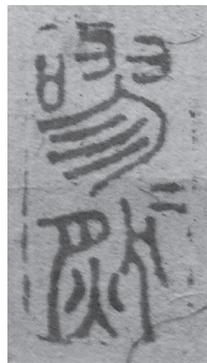
愈樾③は旭荘の詩について，次のように述べる，「吉甫の詩，才気横溢して変幻百出，長編大作は五花八陣の奇を極む。而して片言単語も又雋れ，永く味わおう可し。（中略）宜しく其れ東国詩人の冠と為すべきなり。詩美，収するに勝えず，上下の巻と為す。と評している。（『和漢詩歌作家辞典』（森忠重著，みずほ出版 1972年）参照）。

本軸の大きさは，縦182cm×横37.6cm，紙本部分の大きさは，縦103cm×横27.5cmで，引首印は「嘒々然（朱文）」（縦2.2cm×横1.2cm），落款印は「広瀬謙印（白文）」（2.0cm角）と，「吉甫氏（朱文）」（2.0cm角）である。

積文に関しては以下の通りである。

天公弄狡獪観者此愕然如何 / 小松樹高于富山巔  
旭叟

箱書きには「旭叟富山詩画」と書かれている。  
〈王〉



日書79 ひろ せいそん ぎょうそうしよじく  
 広瀬青邨 行草書軸

クE215  
 軸装

①前刊目録解題  
 (五)日書54を  
 参照。

②ひろせりんが  
 い  
 (1836~1874)  
 広瀬旭莊の子。  
 伯父の広瀬淡窓  
 に養われ、広瀬  
 青邨と咸宜園を  
 経営。維新後  
 は東京の史館に  
 勤めた。詩文は  
 淡窓・旭莊を凌  
 ぐとの評をえた。  
 林外遺稿は有名。

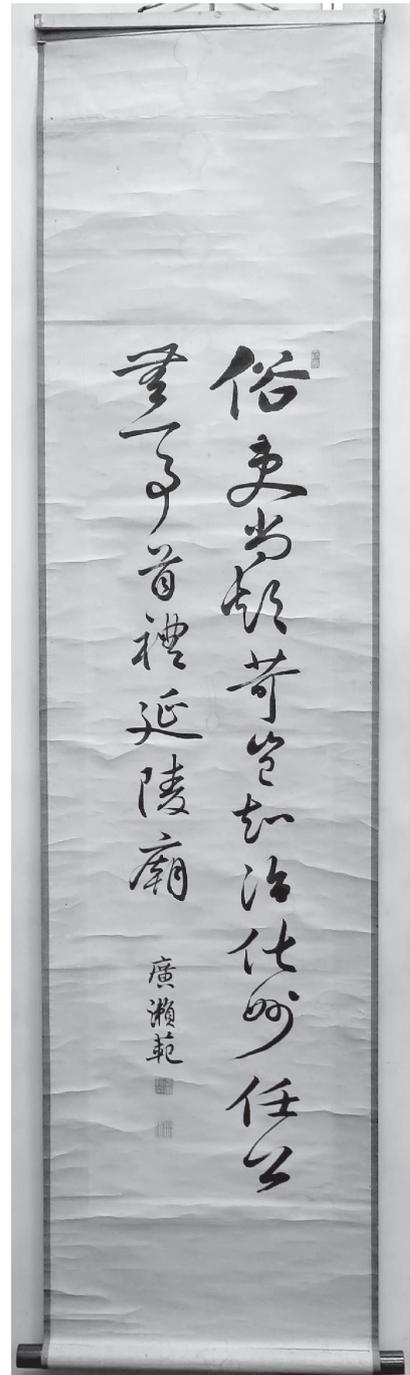
廣(広)瀬青邨(1819~1884)は、本姓を矢野、名は範治、字は世叔といい、幕末から明治にかけて活躍した儒者である。

文政二年八月十五日、豊前国下毛郡(大分県)に生まれ、広瀬淡窓<sup>①</sup>の咸宜園にまなび、養子となる。咸宜園は、広瀬淡窓が豊後・日田に開いた日本最大規模の私塾である。「咸く宜し」とは、すべてのことがよろしいという意味で、淡窓は門下生一人一人の意思や個性を尊重する教育理念を塾名に込めた。淡窓は、末弟・旭莊の子林外<sup>②</sup>に跡を継がせようとしたがまだ幼く、その成長まで、老齡の淡窓を補佐して塾を預かる者が必要だった。21歳にして都講となっていた矢野範治(青邨)は、塾政を補佐しており、弘化元年(1844)六月、官許を得て淡窓の義子となり、広瀬の姓を称することになった。文久年間(1861~1863)の頃豊後国府内藩に仕えて旭莊・林外とともに「三広」と称せられた。1868年東京の漢学所に入り、のち修史局に出仕、廃局後は牛込に東宜園を開いて門人を教授した。その学は朱子を宗とし、老莊を好んだ。明治十年東京華族学校(のちの学習院)の教授・監事となった。明治天皇に対し、監事として学事報告と『論語』を進講した。明治十五年山梨県立徽典館の校長。「青邨日記」をのこした。明治十七年二月三日66歳で死去。

本軸は、縦160.5cm×横40cm。紙本部分は、縦107cm×横29cm。引首印は「中城主人(白文)」(縦2.2cm×横1.1cm)、落款印は「廣瀬範印(白文)」(縦2.2cm×横2.1cm)、「世叔(朱文)」(縦2.1cm×横2.2cm)が押捺されている。釈文は以下の通りである。

俗吏尚頓苛岂知治化妙任上 / 無一事首禮延陵廟廣  
 瀬範

〈王〉



廣瀬青邨肖像画  
 財団法人広瀬資料館所蔵。

日書80 おおた がきれんげつ たんざく 大田垣蓮月 短冊「むれがめの」

クE108  
クE153  
額装

①むとべよしか (1806~1863)  
幕末の国学者、神官。18歳で平田篤胤に入門し、国学に研鑽。のち孝明天皇にも進講した。是香は篤胤の思想の強い影響下に産須那神の役割を強調、産須那社尊崇運動を展開した。また彼は歌学にも造詣深く、歌格研究の大家でもあった。

②うえだあきなり (1734~1809)  
江戸時代後期の俳人、歌人、作家、国学者。本名、東作。35歳で怪談小説集『雨月物語』を著した。独自の才能を発揮し、日本文学史上でも高い地位を占めるものとなった。また、40歳の頃から和歌にも心を注いでいる。

本所蔵品の筆者である大田垣蓮月 (1791~1875) は、江戸時代後期の歌人。寛政三年一月八日に生まれ、名は誠 (のぶ)。出家して蓮月という。伊勢藤堂家分家：藤堂某の庶女といわれ、生後直ちに京都大田垣伴左衛門光古の養女となる。8、9歳頃、亀岡城主に勤仕し、薙刀・鎖鎌・剣術・歌舞・歌・裁縫など人に教えるに足るほどの芸が7つもあったという。歌は、六人部是香<sup>①</sup>に添削を請い、晩年の上田秋成<sup>②</sup>に学んだという。18歳で大田垣家の養子：望古と結婚、一男二女を挙げたがいずれも早世し、望古は放逸懈惰、養夫とも合わず離別。後に、入家した養子：古肥と再婚し、一女を挙げたが再び夫の死に遭った。時に33歳。剃髪し、養父：西心 (光古) とともに知恩院山内真葛庵に住んだ。娘と養父も他界し、人生の悲嘆に遭い続けてついに独りとなり、岡崎に居を移した。和歌諷詠を事としたが、自活の道を求めて陶器を作り、みずからの歌を釘で彫った。人々には蓮月焼といい、珍重された。歌友も多く、歌は閑雅、清新、女性のやさしさを伝えている。歌集に『海人の刈藻』『蓮月式部二女和歌集』(誤あり)がある。また、蓮月は晩年、若き日の富岡鉄斎を侍童として暮らし、薫陶をし、大きな影響を与えた。明治八年十二月十日没。85歳。墓は京都市北区西賀茂小谷墓地にあり、墓銘は富岡鉄斎筆である。

本額は、縦132.5cm×横47.5cmである。短冊の大きさは、縦36.5cm×横6cm。虫食いが所々にみられる。短冊の右下に、「蓮月」という落款が小さく書かれている。

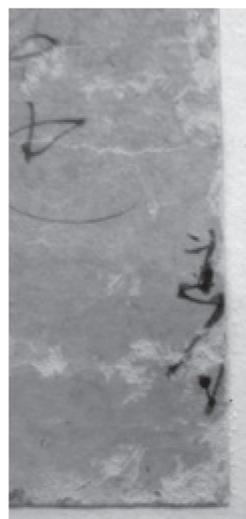
積文は、「寿亀祝 むれが(可)めのひとつ(ひとつ[繰り返し符号])の(能)よろづ世をとりあつめ(免)つ、君をか(可)ぞ(曾)へん 蓮月」である。

蓮月は、とても素直で清らかな性格の女性であったようであり、それが歌風にも書風にもよく反映されている。この書は、回転運動が巧みに用いられ、字の中の空間が広くとられているため、大らかで穏和な印象を受ける。同じ句で、短冊に揮毫されたものがもう1点確認されている。

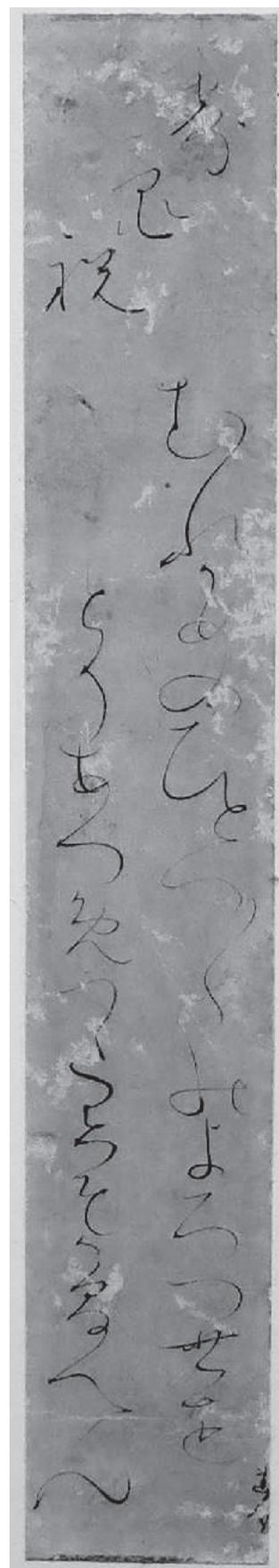
〈福岡〉



全体



「蓮月」落款部分



日書81 らいきょうへい ごごんぜっく  
 頼杏坪 五言絶句

クE50  
 軸装

①らいさんよう  
 (1780~1832)  
 大阪生まれの江戸時代後期の歴史家、思想家、漢詩人、文人。著作『日本外史』は、幕末から明治初期の人々に影響を与える。

②かたやまほっかい  
 (1723~1790)  
 江戸時代中期の儒者・漢詩人。大阪で塾を開き、多くの門人を集める。詩文をよくし、詩社混沌社を結成。

③びとうじしゅう  
 (1745~1814)  
 江戸時代後期の儒学者で、寛政の三博士のうちの一人。妻・梅月の姉が頼山陽の母である頼梅颯(らいばいし)。

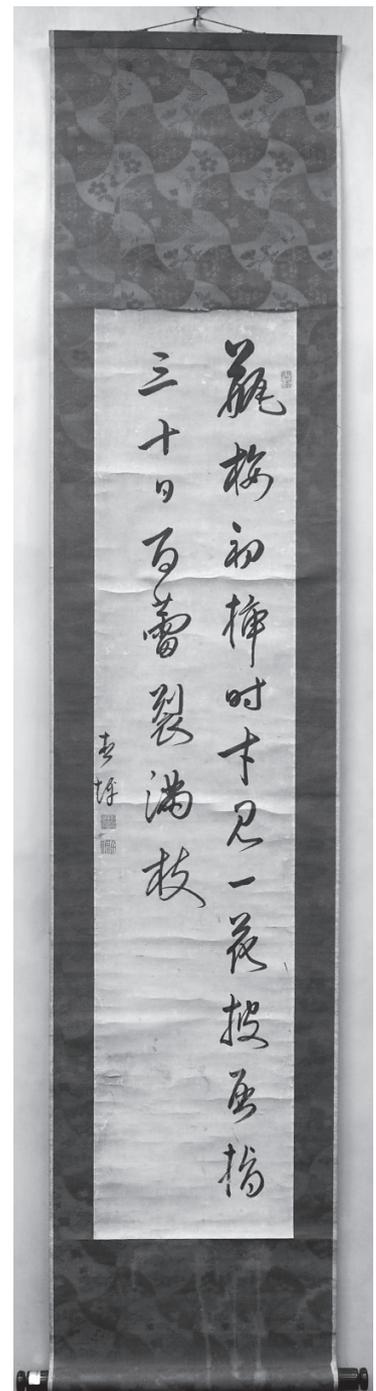
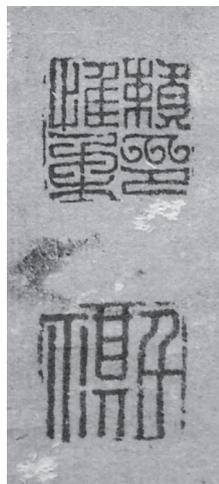
④あんよういん  
 現在の広島市南区比治山町の多聞院。

本所蔵品の筆者である頼杏坪(1756~1834)は、江戸時代後期の儒学者で、頼山陽<sup>①</sup>の叔父である。諱は惟柔(ただなご)、字は千祺(せんき)また、季立。号は杏坪・春草で、通称は万四郎である。安芸国(広島県)竹原出身で、宝暦六年(1756)に生まれ、父は紺屋を営む亨翁(又十郎)である。長兄春水・次兄春風(惟疆、千齡)とともに大阪において修学し、片山北海<sup>②</sup>の詩社である混沌社に学ぶ。天明五年(1785)広島藩儒に挙用、しばしば江戸に勤番することもあった。この時期から、頼山陽の教育に力を注ぐ。山陽を伴って出府し、尾藤三洲<sup>③</sup>の門に入れることにした。文化八年(1811)郡方役所詰に転じ、三次(みよし)町奉行などとして治績があがった。天保五年(1834)七月二十三日没。広島の安養院<sup>④</sup>に葬られる。

その著に『春草堂詩鈔』八卷(『詩集日本漢詩』)、『原古編』六卷、『春草堂秘録』、『杏翁意見』、『老の絮言』などの他、『芸藩通志』一五九卷がある。

本軸は、縦186cm×横39cmである。紙本部分の大きさは、縦127.5cm×横27cmである。軸裏に「頼杏坪先生筆」と書かれている。引首印は、「間陽」(朱文)で、縦2.3cm×横1.3cm。落款印は共に朱文で、2cm角である。1顆目が「頼惟柔印」(回文)、2顆目が、「千祺」。釈文は、「瓶梅初挿時才見一花披屈指三十日百蕾裂満枝 杏坪」であり、自作の詩と考えられる。梅を瓶に初めて挿した時は、花が一つだけしか咲いていなかったが、30日指を屈して数えると、枝には100の蕾が裂け、花が満ち満ちていたという情景を表した詩である。

この書は、細く切れ味のある線質で書かれている。縦長・横長の字形がうまく調和し、行中の振幅の変化が自然な書である。 (福嶋)



頼杏坪肖像(谷文晁『近世名家肖像』)

日書82 なかばやし ごちく ぎょうそうしよ に ぎょうじく 中林梧竹 行草書二行軸

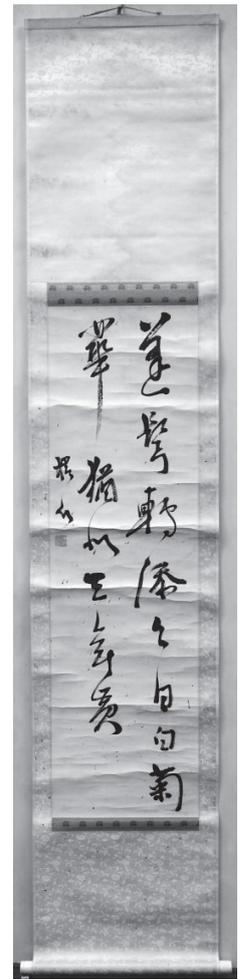
クE9  
軸装

本軸は中林梧竹（文政十年：1827～大正二年：1913）の書である。幕末・明治の書家。肥前国小城郡小城町に生まれる。名は隆経，通称を彦四郎，字は子達。なお，人物の詳細は本解題（五）56頁，日書68を参照していただきたい。

梧竹の書は，日野俊顕氏によると，「ごく単純にみても梧竹ほど広いレパートリーをもって，篆隸楷行草の各書体を自由自在に書いた人はいない。まるで書体の博物館である。」と評される。各書体にバリエーションがあり，そのいずれもが梧竹のオリジナルで，例えるなら多種多様なフォントを備え，見方を変えれば，千差万別の豊かな表現力を持っている。（『中林梧竹 書』参照）

釈文は「逢髯轉添今日白菊／華猶似去年黄／梧竹」である。本軸の大きさは，縦190cm×横37.3cmで，紙本部分は，縦102.1cm×横29.4cm。落款印は「中林隆経章（白文）」（2.2cm角）が押捺されている。

落款の書きぶりや用いた印から，50歳代の作品と推測される。梧竹の草書の根底には，王羲之の「十七帖」がある。行草書を書く際の構成は，「十七帖」の行間の余白の美しさを意識していたという。本軸は梧竹の連綿草書が完成するまでの過渡期の書と考えられる。  
〈江頭〉



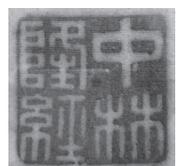
日書83 なかばやし ごちく そうしゆん 中林梧竹「蔵春」

元番号なし  
額装

大字「蔵春」に落款「庚子蔵春 梧竹書」と入れた本額は，中林梧竹（文政十年：1827～大正二年：1913）の書である。「蔵春」は，「春陽の氣を含みたくはへる」（『大漢和辞典 卷九』参照）という意味で，落款の「庚子」から，明治三十三年，74歳の作品といえる。

本作品は本学の書道教育実習室に展示されている。どのような目的で書かれたか詳細は不明だが，福岡学芸大学特設書道科主任教授の横田小竹氏が本学に展示したものと伝えられている。1962年に特別教科教員養成課程（書道）が設置された当時，学生はこの作品を見て，学び，巣立っていった。この「蔵春」は，「蔵春会」として本学書道科の同窓会の名称になっている。

本額の大きさは，縦76.5cm×横231cmで，紙本部分は，縦53cm×横180.5cm。引首印は「梧竹深處（白文）」（縦7.1cm×横4.5cm）落款印は「中林隆経（白文）」（縦6cm×横5.9cm），「字子達（朱文）」（縦5.9cm×横6cm）が押捺されている。線を切ると断面が丸みを持っているような立体感のある筆触で書かれている。  
〈江頭〉



日書84 ひだいてんらい しつじつごうけん  
比田井天来「質実剛健」

元番号なし  
額装

①現在の佐久市  
協和。

②補遺13参照。

③うえだそう  
きゅう

(1899~1968)  
兵庫県三木市奥  
谷出身の書家。

④かねこおうて  
い

(1906~2001)  
北海道松前郡出  
身の書家。

⑤くわはらすい  
てい

(1906~1995)  
北海道帯広市出  
身の書家。

⑥てしまゆうけ  
い

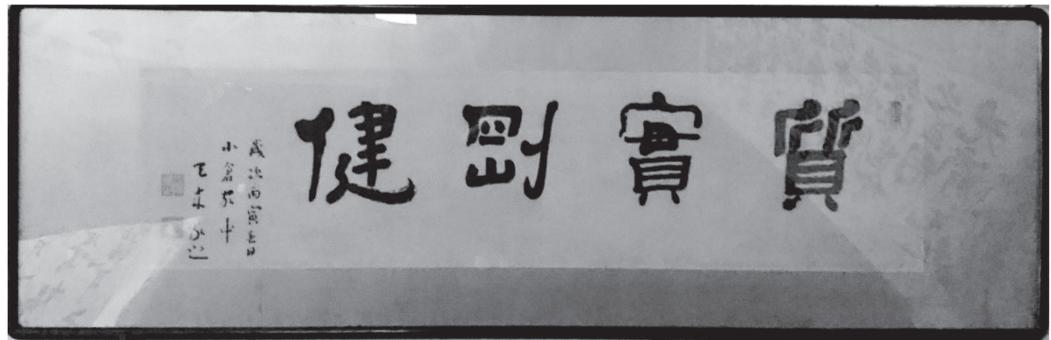
(1901~1987)  
高知県安芸郡安  
芸町（現在の安  
芸市）出身の書  
家。

比田井天来は、明治五年（1872）一月二十三日、長野県北佐久郡協和村①片倉に、比田井清右衛門とコトの三男として生まれる。字は子漸、一名象之、号は天来、別に大樸山人、画沙道人がある。若い時代には、淳風および天籟と号した。生家は徳川時代から名主を長くつとめ、醤油の醸造を家業とし、天来の少年時代には製糸業を営んでいた。幼名は常太郎といい、人一倍腕白な子どもであった。独学によって書の道に入り、家蔵する法帖類を片っぱしから独習し始めたが、漫然と手習うだけに飽き足らず、書風の異なる所以を丹念に比較検討するという、科学的な学び方をした。東洋独自の芸術として、書の力を生き生きとよみがえらせ、現代に続く展開へと導いた人物である。

明治三十一年（1898）、26歳にして日下部鳴鶴②の門に入る。自分の手本を強要しなかった鳴鶴と、古典筆法の研究に没頭し独自の生き方を徹し抜いた天来により、日本の書は新たなページを開いていった。大正末期から昭和にかけて書壇に君臨し、芸術院会員ともなり、自ら率いて大日本書道院を創立した。戦後には前衛運動の展開まで見ることとなった。弟子をとらなかつた天来であるが、昭和四年（1929）の上田桑鳩③を筆頭に、昭和七年（1932）には金子鷗亭④と桑原翠邦⑤、手島右卿⑥らが全国から集結し、後世にも多大な影響を与えた。

昭和十四年（1939）一月四日、天来は大志を遺して68歳をもって鎌倉に逝去した。

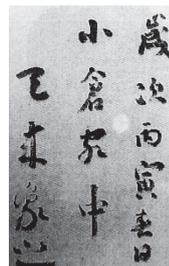
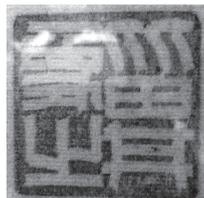
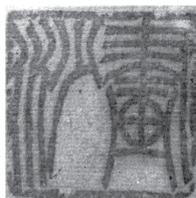
天来の芸術は一言にして尽くすことはできない。殷周以降の古典は一つとして究めないものではなく、篆・隸・楷・行・草、場や時に応じて発想・表現も変化に富んでいる。「質実剛健」は石橋犀水に贈られた作品である。一点一画きびしく古典を踏まえつつ、独特な結体により多彩な表現力が感じられる芸術味豊かな魅力をもっている。



本額の大きさは、縦76.5cm×横232cm、紙本部分の大きさは、縦44.5cm×横175cmである。積文は以下の通りである。

質實(実)剛健 歳次丙寅春日 小倉家中 天来象之

引首印は、「沙上盟主（さじょうのめいしゅ）（朱文）」（縦4.5cm×横2.5cm）、落款印は、「比田井象之（白文）」（4.7cm角）、「画沙（かくさ）（朱文）」（4.7cm角）が押捺されている。三顆共に当時の篆刻名家であった河井荃廬が刻した。落款に「歳次丙寅春日」とあることから55歳頃の書である。現在は本学書道演習室に展示されている。〈山浦〉



## 補遺 1 <sup>りゅうもんどうじん</sup> 龍門道人 題寶満山

クE104  
軸装

①だざいふし  
福岡県中西部の筑紫地域に位置する市。古代には九州を総監する国の役所「大宰府」が設置された。大宰府天満宮等の史跡が多数あり、毎年多くの人々が訪れる観光都市でもある。

②おおのやま (しおうじやま)  
最高点のある大野山(標高410m)を中心に岩屋山、水瓶山、大原山と呼ばれる4つの山から構成され、総称として四王寺山と呼ばれる。

寶(宝)満山は太宰府市<sup>①</sup>の北東に聳える標高829.6mの山であり、筑前の主峰の一角をなしている。宝満山は、竈門山(かまどやま)、御笠山(みかさやま)という別称でも、古くから多くの人に親しまれてきた。太宰府駅を降りると、左手には、頂上の平らなやさしい姿の大野山(四王寺山)<sup>②</sup>、右手奥には、一際高く宝満山が聳えているのが見える。このどちらの山も、太宰府の歴史を彩る上で重要な役割を果たしてきた。麓には竈門神社があり、春は桜、秋は紅葉に包まれて静寂そのものに鎮座している。宝満山の美しい自然は人々の歌心を誘い、昔から優れた歌が詠まれてきた。現在でも、竈門神社があるように、この「カマド」という名は、古代、中世、近代を通じて、最も広く使われてきた名で、古文書、古記録類にも、ほとんどこの名で登場している。

伝教大師・最澄も宝満山で祈禱をしたといわれており、日本の山岳信仰のあり方を考える上で重要な山として、2013年10月17日付で文化財保護法に基づく史跡に指定された。

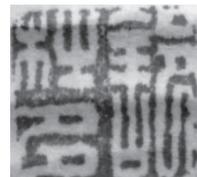
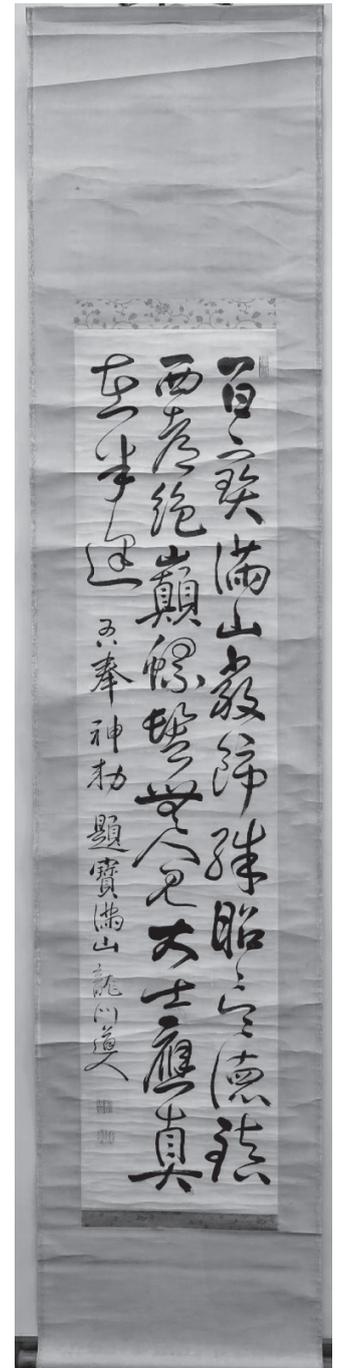
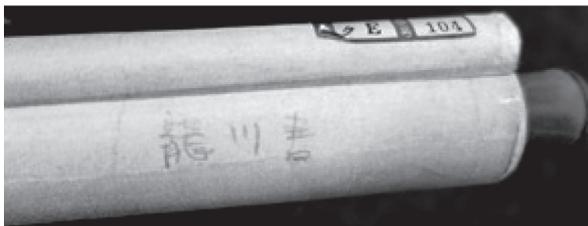
本軸は、縦189cm×横39.5cm、紙本部分の大きさは、縦123cm×横27.5cmである。引首印は、「勅轍(白文)」(縦3.1cm×横1.4cm)、落款印は、「鈴杜多(白文)」(縦2.1cm×横2.3cm)、「龍門(白文)」(縦2.1cm×横2.4cm)が押捺されている。釈文は以下の通りである。

百寶満山巖飾殊 昭々令徳鎮西都  
絶巔螺髻無人見 大士應真在半遇  
右奉神勅 題寶満山 龍門道人

この書は、七言絶句の詩が行草体で軽快に書かれている。静かな書き出し、筆先をつかった緩急自在の運筆は、山の深い静寂さと壮大さを表現しているようである。〈山浦〉



宝満山(『宝満山歴史散歩』より)



補遺 2 <sup>にしかわけんなん</sup> 西川 萱南 <sup>ぎょうそうしよじく</sup> 行草書軸

クE44

軸装

①ぶんけん

旧制の文部省教員検定試験の通称。

②補遺 13 参照。

③さんたいせんじもん

中国六朝時代、教科書としてもちいられていた千字文（一千字の韻文、250の4字句から成る）を、楷書・行書・草書の三書体で構成したもの。

④日書 84 参照。

⑤かわいせんろ（1871～1945）

近代日本の篆刻家である。呉昌碩に師事し、金石学に基づく篆刻を日本に啓蒙し、その発展に尽くした。

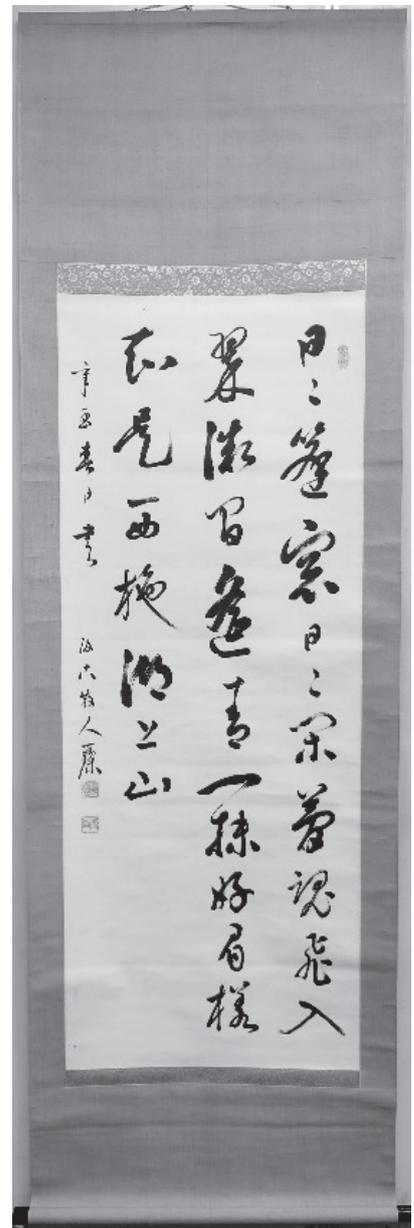
本軸の筆者、西川萱南（1878～1941）は、本名を鐵五郎といい、福岡学芸大学小倉分校の前身である、小倉師範学校の初代書道教諭として名を馳せていた。明治二十一年（1888）、福岡師範学校を卒業した後、小学校校長を経て、文検①に合格した萱南は、小倉師範学校に就任した当時、日本書道界の第一人者といわれていた。自身が学生時代、四国旅行に行き、日下部鳴鶴②の書を鑑みて感激したことから、鳴鶴を慕って入門することになった。鳴鶴の三体千字文③を教科書として学生に与え、小倉師範学校の書道教育を鳴鶴流によって実施し、小倉伝統の書の根源を確立していったのである。稀に見る手腕の人であり、その優れた教育力は高く買われ、生徒も非常に敬意を表し練習に励む者が多かった。萱南の信念ある指導の存在は尊く、石橋犀水、菅雅芳、四角松濤、岡島無玄、日下部鳴鳳、進藤芝山、松島伝など、書道を志す者を多く輩出していった。これは、萱南の教育者としての人間性と、その実力の反映に他ならない。萱南がライバルとして意識していたのは、比田井天来④ただ一人であった。（『富陵の書流』、『学書五十年』参照）

本軸は、縦 206.5cm×横 64cm、紙本部分は、縦 133cm×横 51.5cm である。積文は以下の通りである。

日々篷窓日々閑 夢魂飛入翠微間  
遥青一抹好眉様 知是西施湖上山  
辛酉春日書 汲古散人百鍊

引首印は、「不染塵（朱文）」（縦 4cm×横 2cm）、落款印は、「鐵五郎印（白文）」（3cm 角）、「萱南（朱文）」（3cm 角）が押捺されている。三顆共に当時の篆刻名家であった河井荃廬⑤が刻した。

保存状態が非常に良好である。大小・太細の変化に富み、落ち着いた線質の中にも、切り込むような筆力を感じることができる。 〈山浦〉



西川萱南  
（出典『富陵の書流』）

補遺3 <sup>にしかわけんなん</sup>西川萱南 <sup>にきよくいつそうびょうぶ</sup>二曲一双屏風

元番号なし  
屏風

①補遺2参照。

本屏風の筆者は西川萱南である。人物については、補遺2を参照していただきたい。

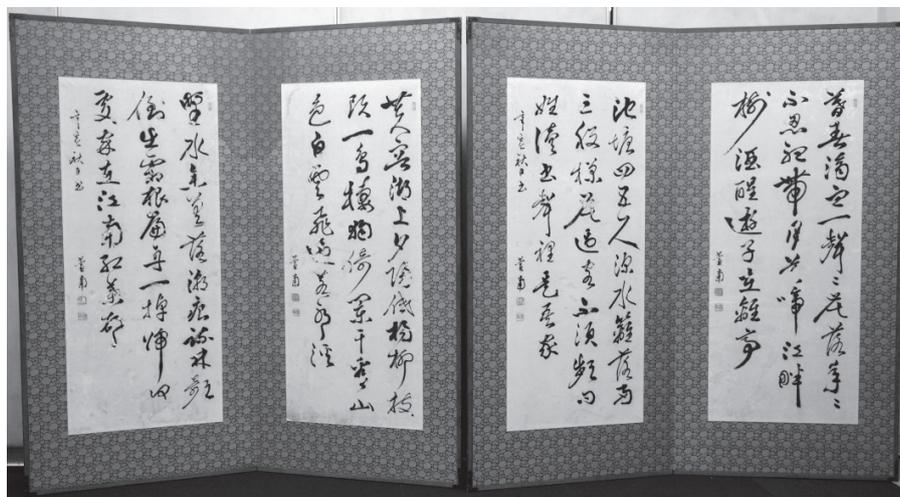
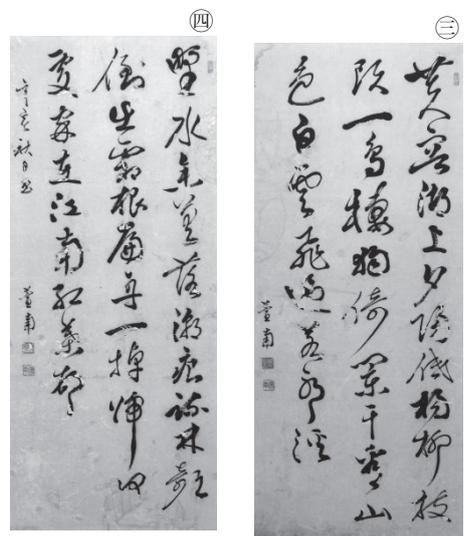
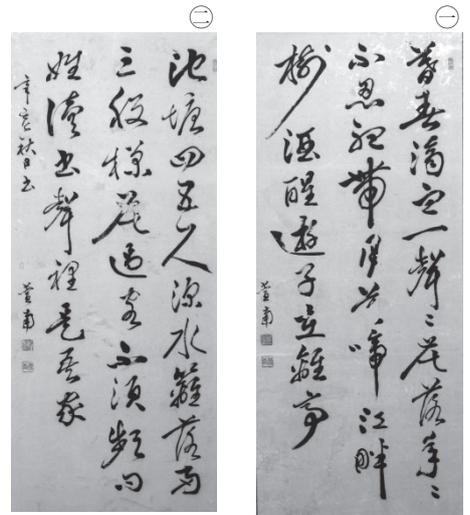
一扇の大きさは、縦176.5cm×横85.5cm、紙本部分の大きさは、縦133cm×横57cmが四曲分で、引首印は、「游于芸（朱文）」（縦2.8cm×横1.2cm）、落款印は、「鐵五郎印（白文）」（2.8cm角）、「萱南（朱文）」（2.8cm角）が押捺されている。三顆共に当時の篆刻名家であった河井荃廬<sup>①</sup>が刻した。

積文は以下の通りである。

- ①暮春滴血一聲々 花落年々下忍聽  
帶月莫啼江畔樹 酒醒遊子在離亭  
萱南
- ②池塘四五尺深水 籬落兩三般様花  
過客不須頻問姓 讀書聲裡是吾家  
辛亥秋日書 萱南
- ③芙蓉湖上夕陽低 楊柳枝頭一鳥棲  
獨倚闌干看山色 白雲飛過若水溪  
萱南
- ④野水余差落潮痕 疎林欹倒出霜根  
扁舟一棹歸何處 家在江南紅葉村  
辛亥秋日書 萱南

この書は、七言絶句の詩が行草体で書かれている。所々で最終画を長く伸ばし、長脚を生かして全体をすっきりみせている。補遺2、補遺4の作品にも共通しているが、「一」を長く書いている所も特徴的である。落款に辛亥秋日書とあることから、1911年の書、つまり筆者が33歳の時の書である。

〈山浦〉

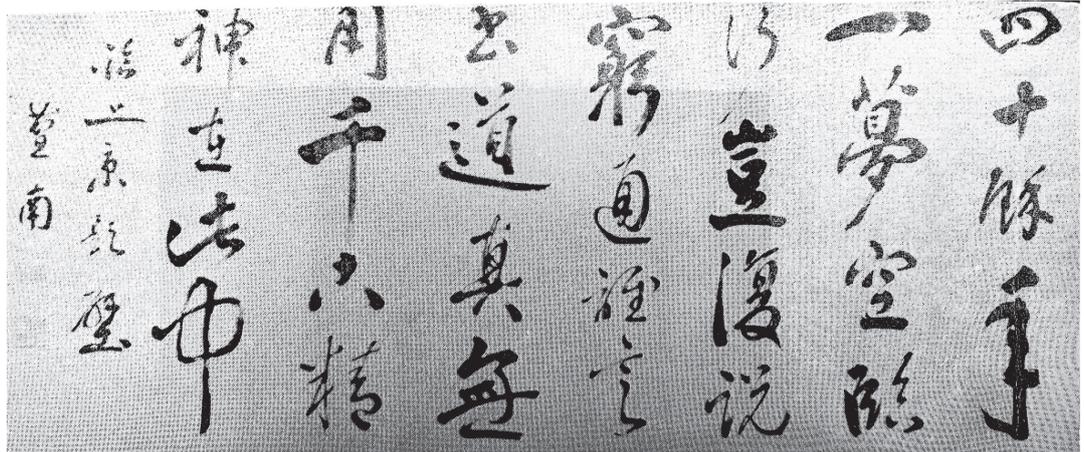


補遺 4 <sup>にしかわけんなん</sup>西川萱南 臨上京題壁

元番号なし  
額装

①補遺 2 参照。

本額は、西川萱南の書である。人物については、補遺 2 を参照していただきたい。  
本額の大きさは、縦 87cm×横 186cm、紙本部分の大きさは、縦 60cm×横 142cm である。引首印は、「不染塵（朱文）」（縦 4cm×横 2cm）、落款印は、「西川鐵印（白文）」（3cm 角）、「字百鍊（朱文）」（4cm 角）が押捺されている。三顆共に当時の篆刻名家であった河井荃廬<sup>①</sup>が刻した。



积文は以下の通りである。  
四十餘年一夢空 臨行豈復說窮通  
誰言書道真無用 千古精神在此中  
臨上京題壁 萱南

萱南は、40代に入り人生をかけて鳴鶴の膝下で直接教を乞うことを決心し、教壇をおり、42歳にして妻子を置き突如上京することになった。上京の際、全校生徒を集めた退任式が執り行われた。日頃の平素無言とは一変し、長時間を費やして自己の半生の学書生活を強く述べたという。その時書き残した書が、この書である。この時の相当な覚悟と信念、道のために生きる書道精神は、人々に大きな感銘を与えたのであった。特に、直門であった石橋犀水は、この萱南の告別の辞が自身の学書生活を大きく揺さぶったと『学書五十年』の中で述べている。鳴鶴を捉えた書きぶりは実に深み・風格があり、文字の大小・太細・静動等の変化が自在に盛り込まれ、鑑る者を魅了する書である。また、揮毫時の状況に思いを馳せ、鑑賞することで、より一層感慨深さも増す。現在は、本学の書道演習室 I に展示されている。



（書道演習室 I の様子）

〈山浦〉



補遺5 <sup>しゅうちやうおう そうしよしちせき しじく</sup> 周長応 草書七夕詩軸

クE23  
クE26  
軸装

①らいさんよう (1781~1832)  
大阪生まれの江戸時代後期の歴史家、思想家、漢詩人、文人。幼名は久太郎、名は襄、字は子成。

②うらがみしゆんきん (1779~1846)  
江戸後期の文人画家。名は選、字は伯挙、通称は喜一郎、別号に睡庵・文鏡亭・二卿等。幼少より父に画を学び、父に従って各地を遊歴する。山水・花鳥に優れる。

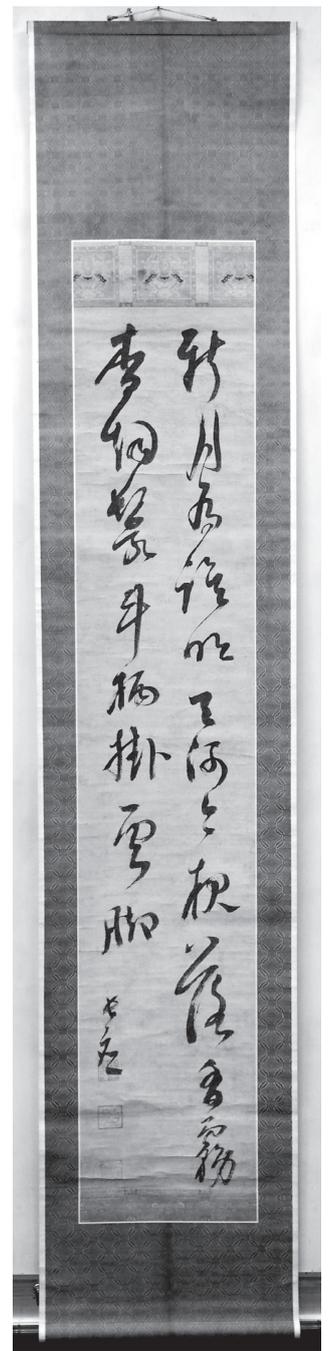
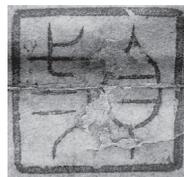
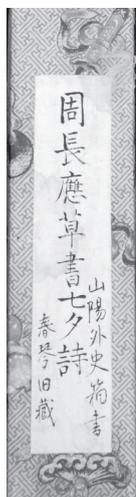
本作品の筆者周長應については不明。  
本軸は、縦 199cm×横 39.5cm、紙面部分は、縦 133.7cm×横 26.5cm で、積文は以下の通りである。

新月為誰明天河今夜落香霧 / 杏煙鬪斗柄掛雲脚 長應  
落款印は回文で「周長應印(白文)」3.0cm 角、「伯式(朱文)」3.5cm 角、「己未進士出身(朱文)」3.2cm 角である。

木の箱書きには「周長應草書七夕詩 一楨」と記されている。木箱の蓋には「周長應七夕詩山陽外史函書春琴<sup>②</sup>旧蔵」と書かれている。布の箱書きには「山陽<sup>①</sup>外史箱書周長應草書七夕詩 春琴旧蔵」と記されている。軸の裏には「周伯貳草書七夕詩」と書かれている。この題記の下に二つ印が押捺されている。上は、「紀選私印(白文)」であり、下は、「漁煙鷗雨(朱文)」である。「漁煙鷗雨」という言葉は李萊老青玉案詞の中に出てくる言葉である。

李萊老は約 1260 年前後に生きた人物で、字周隱、詞綜の字は遊翁、号は秋崖、詞人であり、住所や生卒年は不詳である。兄李彭老(1258 年前後に生きた人物で、字商隱、号箕房、詩人であり、住所や生卒年は不詳である。)と一緒に『龟溪二隱集』を作った。

軸の裏にも印が押捺されている。この印は「凌秋道人清賞(朱文)」である。



補遺 6 はしもとかんせつ ろつきよくびょうぶ 橋本関雪 六曲屏風

クE5001  
クE005  
屏風

①しじょうは 日本画界の派閥。京都画壇の一大勢力。  
②たけうちせいはう (1864~1942) 戦前の日本画家で、近代日本画の先駆者。  
③ごしょうせき (1844~1927) 前解題(三)中書32参照。関雪著『南画への道程』には、関雪の絵を称賛した手蹟が掲載されている。  
④おういってい (1867~1937) 民末清初に活躍した実業家・書画家・政治家。  
⑤せんそうてつ (1897~1963) 中国の画家・篆刻家。関雪の推薦で個展を開き、『瘦鉄印存』4巻を出版。関雪のために57顆の印を刻した。  
⑥はくさそんそう 大正五年(1916)に関雪が建てた銀閣寺近くの邸宅。創作活動の本拠地とした。

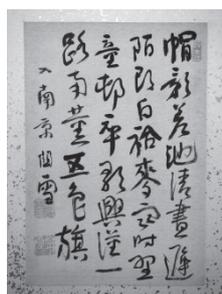
本作品は、橋本関雪(明治十六年:1883~昭和二十年:1945)の書である。近代日本美術史に大きな業績を残した日本画家、芸術家である。神戸郊外の坂本村(現神戸市中央区楠町)で、漢学の素養溢れる家系に生まれた。幼名は成常、のちに関一(貫一)と改めた。房弘という名も知られ、字は士道、諱は弘である。十代の頃から関雪の号を使った。

幼少の頃から、父海関の元で漢学の教育を受け、7歳頃、絵画に興味を示した。その後、片岡公曠に入門し、四条派<sup>①</sup>の写生、写実絵画法を本格的に学んだ。12歳で漢詩の才能を現し、その傍らで俳句、和歌も作るようになり、絵画の才能も認められた。19歳の時に、『関雪詩稿』を出版。21歳で、京都の画家竹内栖鳳<sup>②</sup>主宰の竹丈会に入会。以降、文展で大きな業績を収めた。大正二年(1913)、30歳から四十数回以上中国に渡った。関雪は「師とするものは支那の自然」とし、その風景や風俗を作品に取り込んでいった。呉昌碩<sup>③</sup>や王一亭<sup>④</sup>、銭瘦鉄<sup>⑤</sup>ら多くの文人と交流した。関雪は銭瘦鉄の書画と篆刻を絶賛し、日本に招待、白沙村莊<sup>⑥</sup>に銭瘦鉄のために一室をつくり、日本一流の文化人・書画家たちと交流させた。

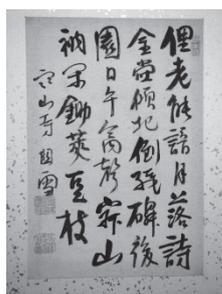
関雪は海関からは中国的な教養を、故郷神戸で西欧の文物、風土に関する知識を、そして海関と片岡公曠から日本的なものを身に着けた、中国、欧州、日本の三つの教養と感覚を持ち合わせた人間といえる。昭和二十年(1945)二月、63歳で狭心症の発作により死去した。

一扇の大きさは、縦277cm×横125cmで、紙本部分は、書はそれぞれ縦24.8cm×横27cm。一曲に二点、計十二点。画は印刷で、それぞれ縦24cm×横29cm。一曲に一点、計六点。引首印は「醉生涯(白文)」(縦1.8cm×横0.7cm)、落款印は「橋氏士道(白文)」(縦1.8cm×横1.9cm)、「関雪(白文)」(縦1.8cm×横1.9cm)が押捺されている。3点目の雅号印の押印は、天地が逆となっており、7点目と11点目は姓名印が押捺されていない。積文は以下の通り。

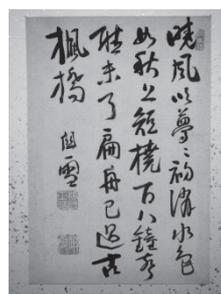
- ① 残櫨堆尾舊詞堂洗/硯無人池自荒滿眼/菀蒲昏欲雨黒雲/添作麝煤香/硯池 関雪
- ② 曉風吹夢々初消水色/如秋上短檣百八鐘聲/聽未了扁舟已過古/楓橋 関雪
- ③ 俚老能語月落詩/金堂傾把倒殘碑後/園日午禽聲寂山/衲閑鋤莢豆枝/寒山寺 関雪
- ④ 帽影差池清畫遲/陌頭白袷麥寒時野/童邨卒歌興漢一/路南五色旗/入南京 関雪
- ⑤ 劫烟吹佛前燈金/粉南朝幾興一/夜月明清北水瑠/璃宝殿更無僧/金陵 関雪
- ⑥ 宴散燈殘人未眠兵/塵混入綺羅烟金溝/腥血深宵雨濺到/秦涯歌吹船/関雪



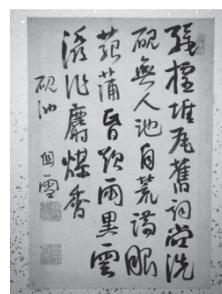
4



3



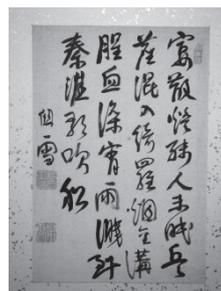
2



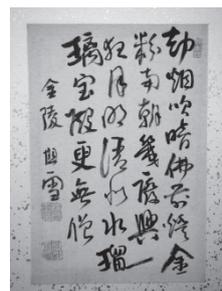
1



一幅目下段

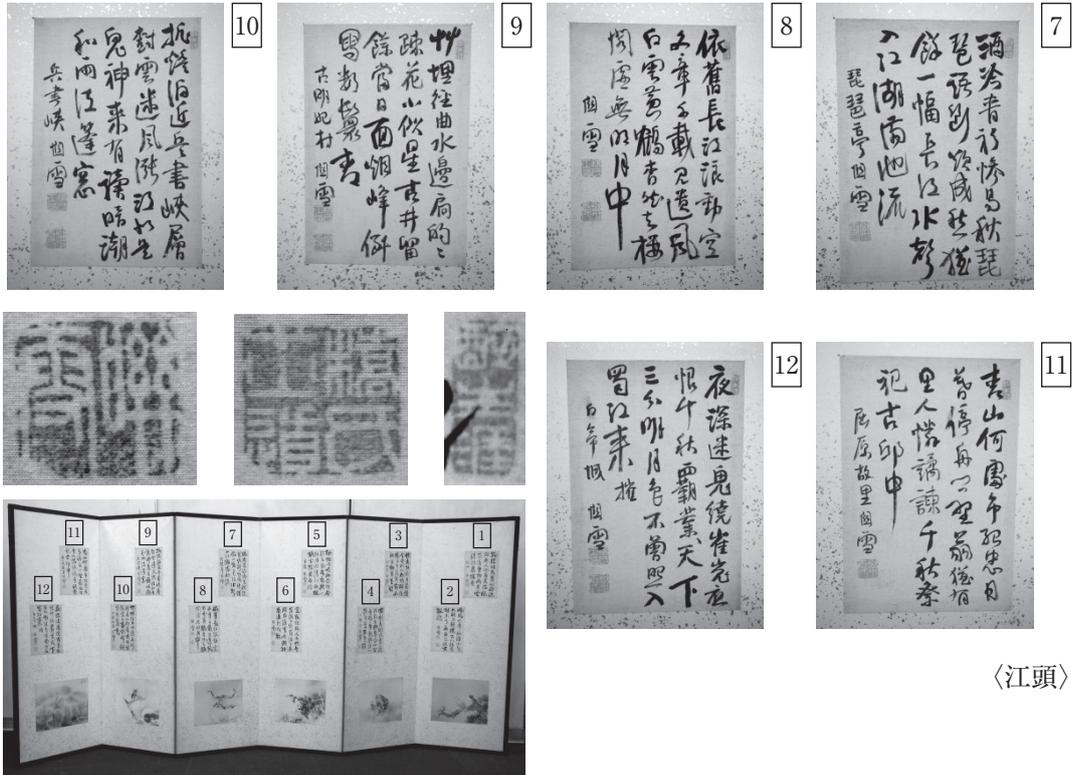


6



5

- 7 酒冷青衫慘易秋琵琶語斷欲成愁猶餘一幅長江水聲入江湖滿池流琵琶亭聞雪
- 8 依舊長江浪動空文章千載見遺風白雲黃鶴杳然去樓閣虛無明月中閑雪
- 9 艸埋徑曲水邊扁的々疎花小似星古井留餘當日面烟峰倒寫數鬢青古明妃村閑雪
- 10 抗燈泊近兵書峽層樹雲迷風漲江似是鬼神來有讀暗潮和雨江蓬窓兵書峽閑雪
- 11 青山何處市紀忠月暮停舟問野翁猶有里人憐譎諫千秋祭祀古邱中屈原故里閑雪
- 12 夜深迷鬼繞崔嵬夜恨千秋霸業天下三分明月色不曾照入蜀江來摧白帝城閑雪



〈江頭〉

補遺 7 <sup>ひら お こう 雲</sup> 平尾鴻雲 「不忘敬」

番号なし  
額装



本所蔵品の筆者である平尾鴻雲の人物に関しては、不明。

本額は、縦 49cm×横 151.5cm、紙本部分の大きさは、縦 33.5cm×横 112cm である。引首印は、「金石同壽」（白文）で、縦 4cm×横 1.5cm。落款印は、「平尾安印」（白文）、「鴻雲」（朱文）で、共に 4cm 角。「壽」は、「いのちながし」という意味で、「金石同壽」は、命の長いことを金属や石の様に例えた言葉である。所蔵品の状態は、良好でなく、表と裏にシミや破損がみられる。積文は、「不忘敬 鴻雲道人書」で、「不忘敬（敬を忘れず）」とは、敬う心をおろそかにしないとの意である。この書は、章草の雰囲気を変えた朴直な書きぶりであり、字形の変化に富んだ落款部分との調和が見事な作といえる。  
〈福嶋〉

補遺 8 <sup>ぎょうそうしよじく</sup> 行草書軸

クE150  
軸装

本軸の大きさは、縦 168.5cm×横 49cm、紙本部分の大きさは、縦 29.5cm×横 38cm である。引首印は、「龍淵正脈（朱文）」（縦 3cm×横 1cm）、落款印は、「竜（白文）」（縦 1cm×横 0.9cm）、「門（白文）」（縦 1cm×横 0.9cm）が押捺されている。

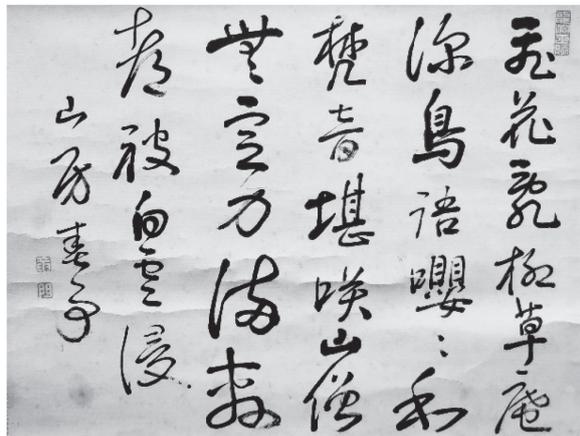
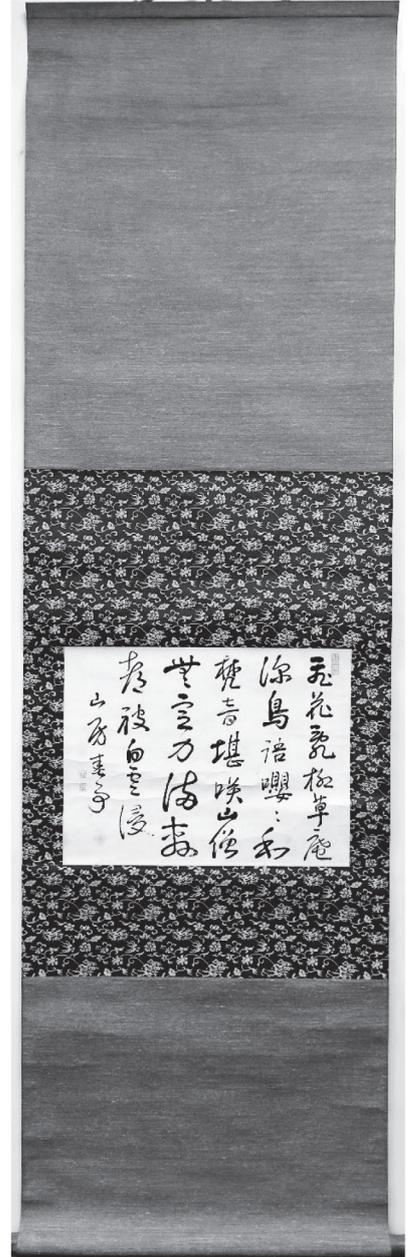
积文は以下の通りである。

飛花亂柳草庵深 鳥語嚶々和梵音  
堪咲山僧無定力 滿敷都被白雲浸  
山房春事

山房春事（さんぼうしゅんじ）は、岑参（しんじん）が詠んだ詩である。岑参（715～770）とは、中国・盛唐の詩人で、河南省南陽出身である。安祿山の乱のため、至徳一年（756）中央に帰り、殿中侍御史、起居舍人、庫部郎中などを経て嘉州（四川省楽山県）の刺史に任じられたが、任期満了後都へ帰る途中、成都の旅舎で病没した。岑嘉州ともいい、詩人・高適と並び称されている。

詩の内容は、「梁園日暮亂飛鴉 極目蕭條三兩家 庭樹不知人死盡 春來還發舊時花」と詠まれており、「梁園の日暮れ時、空には乱れ飛ぶ鳥、二・三軒の家が見えるだけで他には何も無い。かつて、ここに遊んだ人たちは死に絶えてしまったが、春となり、庭の木々は昔と変わらぬまま花を咲かせている。」という意味である。季節の春・秋は、風光が変化をきたす時期であることから、時代の推移変遷を感じさせる。本作品は、筆者がこの詩にならって書したものであると推測される。

書き出しは慎重であり、緊張感のある線で書かれているが、行が進むにつれてリズムが感じられ、四行目で大きな動きを見せている。保存状態は非常に良く、中廻しが紺、天地が茶、紙本部分に金色の筋廻しが入った仕立てとなっている。 〈山浦〉



## 補遺9 ごうちょう あさがほ 豪潮「朝顔」

クE123  
軸装

①きたじませつ  
ぞん

(1636~1697)

江戸時代の書家・陽明学者。黄檗僧などから文徵明の書法を学び、唐様書家の先達となった。その書法は、細井廣澤に伝えられた。

②あきやまぎよ  
くぞん

(1702~1763)

江戸時代中期の漢学者。熊本藩士中山定勝の次男として豊後国鶴崎で生まれる。文・書・画に巧みであった。

③せんがい  
(1750~1837)

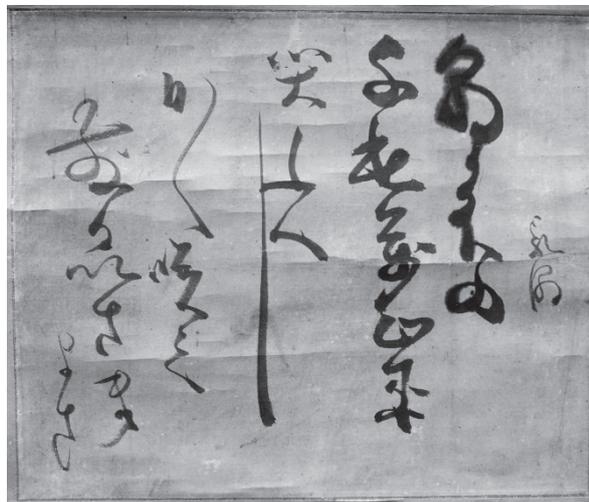
江戸時代後期の臨済宗古月派の禅僧であり、画家でもある。禅味あふれる絵が著名である。

本所蔵品の筆者である豪潮は、寛延二年（1749）から天保六年七月三日（1835年7月28日）まで生きた、江戸時代後期の僧である。密号は遍照金剛、字は快潮、のち豪潮と改める。肥後国玉名郡山下村の生まれである。長崎の出島において、中国僧より直接、当時の中国密教と戒律等の伝授を受けたという。その生涯を通じて、本尊とした準提仏母（准胝観音）の信仰を広めると共に、御霊の供養と飢饉救済を目的とした仏塔の建立に務めた。その仏塔は、約8万4千の数にも及ぶ。創建された最初の塔と伝えられているものが、佐賀県三養基郡基山町大字園部の大興善寺の境内に現存し、文化財となっている。享和二年（1802）に建てられたという。

当時の僧侶の教養として書を読み、唐墨を用いた独特の書風をつくりあげた。北島雪山①・秋山玉山②らとともに「肥後の三筆」と称えられる。また、和歌や文人画も残っており、同時代の禅僧である仙厓③とも交流があったようである。

本軸は、縦195cm×横49cmである。紙本部分の大きさは、縦110.5cm×横35.3cmで、作品部分が縦27.3cm×横32.5cm。押印はされていない。紙本部分には、金で葉が描かれ、一部分は剥がれている。発芽してまもない朝顔の葉のようにも見える。(図①参照) 積文は、「豪潮 朝が(可)ほ(本)の 千秋萬歳 笑ふべし かく咲て(豆) 散るい(以)さぎ(幾)よさ」である。朝顔は時間をかけて、たくさんの花を咲かせるが、そのたくさん咲いた花も短い時間で枯れてしまう。豪潮は、その潔い様子を微笑ましく感じ、揮毫したのであろう。

この書は、伸びやかな線質と自由闊達な字形で書かれている。墨の色やにじみが美しく、やはり、この作品も唐墨を用いて書かれたものと推測できる。 〈福嶋〉



図①

## 補遺10 書状八通

クE54  
卷子

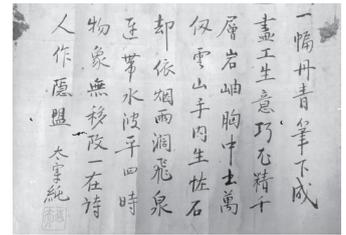
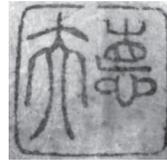
①前刊「目録解題（四）」日書6参照。

本所蔵品は、縦 27cm×横 342cm であり、江戸期の書状等八種を卷子にまとめたものである。

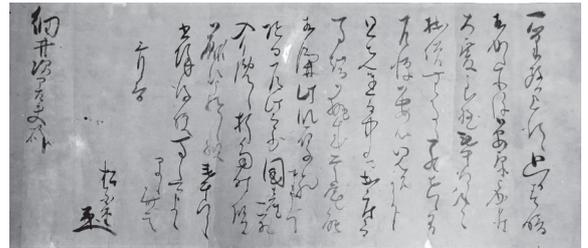


一通目は縦 27cm×横 38cm、落款印は縦 2.6cm×横 2.7cm で「憲夫（朱文）」が押捺されている。筆者である太宰春台（延宝八年：1680～延享四年：1747）は、江戸中期の儒学者であり、名は純、字は徳夫、通称は弥右衛門。春台の他に紫芝園とも号した。釈文は以下の通りである。

一幅丹青筆下成 畫工生意巧尤精千  
層岩岫胸中書萬 仞雲山手内生<sup>石</sup>灰  
却依烟雨潤飛泉 連帶水波平四時  
物象無移<sup>改</sup>一在詩 人作隱盟 太宰純

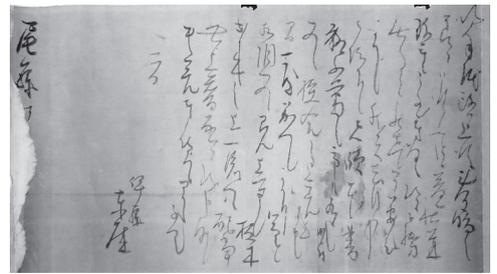


二通目は縦 19.5cm×横 43.4cm で、松花堂昭乗（天正十二年：1584～寛永十六年：1639）が細井広沢<sup>①</sup>に宛てて書いたものである。松花堂昭乗は、法名は昭乗、俗姓は中沼、名は式部。惺々翁また空識と号し、晩年に松花堂と号した。和州春日の里に生まれ、幼少の頃に奈良を離れて山城男山を登り、瀧本坊住職の実乗を師として仕えた。



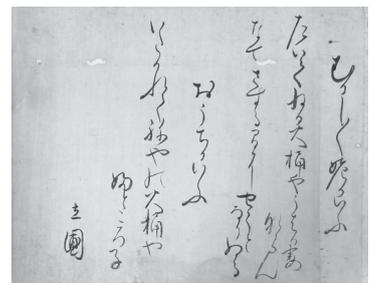
三通目は縦 20cm×横 35.5cm である。

筆者である伊藤東涯（寛文十年：1670～元文元年：1736）は、名は長胤、通称は原蔵、東涯はその号で、堀川の東岸に居したことからつけられたと伝えられている。次男重蔵、三男正蔵、四男平蔵、五男才蔵、みな家学を継いでその名を辱しめなかったため、伊藤五蔵と称せられた。特に東涯は才蔵とともに傑出したため首尾蔵といわれた。



四通目は縦 24cm×横 28.3cm で、釈文は以下の通りである。

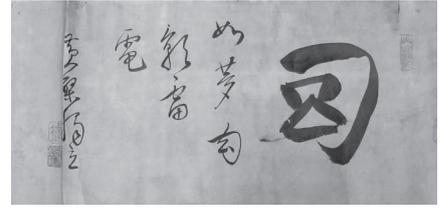
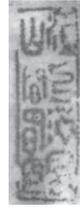
むか<sup>(可)</sup>し<sup>(むかし[くり返し記号])</sup>姥が<sup>(可)</sup>いふ  
だいて<sup>(豆)</sup>ねる火桶やうば<sup>(者)</sup>か<sup>(可)</sup>妻な<sup>(那)</sup>らん  
なでさする間に<sup>(耳)</sup>せごとな<sup>(奈)</sup>りぬる  
おうちが<sup>(可)</sup>いふ  
いだ<sup>(多)</sup>か<sup>(可)</sup>れて<sup>(豆)</sup>ね<sup>(祢)</sup>やの<sup>(能)</sup>火桶やふ<sup>(婦)</sup>ところ子  
立圃



筆者である雛屋立圃（文禄四年：1595～寛文九年：1669）は江戸前期の画家、俳人であり、姓は野々口、名は親重、通称床右衛門、別号は松翁、松斎。京都のひな人形の細工を業としたが、画、俳諧のほか連歌、和歌、書、和学と多才であった。

②いんげん  
(1592~1673)  
姓は林, 名は隆  
琦, 隠元はその  
字。福建省福州  
府福清県の人。

五通目は縦 20cm×横 41cm,  
引首印は縦 3.5cm×横 1.1cm で  
「江上清風山間明月 (朱文)」, 落  
款印は縦 1.8cm×横 1.8cm 「戴笠  
(朱文)」, 縦 1.8cm×横 1.8cm 「天  
外一間人 (白文)」が押捺されて  
いる。釈文は以下の通りである。



③仏教における  
僧侶入門の儀式。

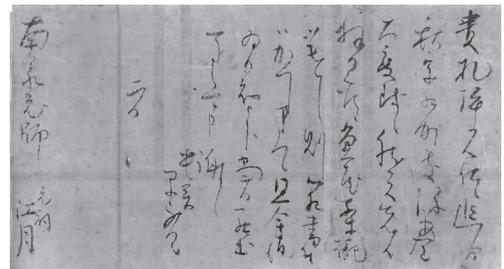
### 幻 如夢幻影雷電 黄檗独立

筆者である獨(独)立(明の萬曆二十四年: 1596~寛文十二年: 1672)は, 姓は戴, 名は笠,  
幼名は觀胤, 字は曼公, 号は荷鋸人で, 浙江省杭州府仁和県の人である。少壯のころにつ  
いては判然としないが, 25 歳の時に杭州の大火によって家財を失い学業を捨てざるを得な  
くなったが, 30 歳のころにはすでに詩名が高かったという。明の滅亡に慨然としていたが,  
承応二年(1653) 58 歳のとき, ついに故国を去って長崎に渡来した。その翌年渡来した隠  
元<sup>②</sup>の声望を慕って得度<sup>③</sup>し, 名を性易, 字を獨立, 号を天外一間人と改めた。獨立は明の  
王寵<sup>④</sup>の書風を伝えたといわれている。

④おうちょう  
(1494~1533)  
字は履仁, のち  
に履吉と改めた。  
雅宜山人と号し  
た。呉縣(江蘇)  
の人。

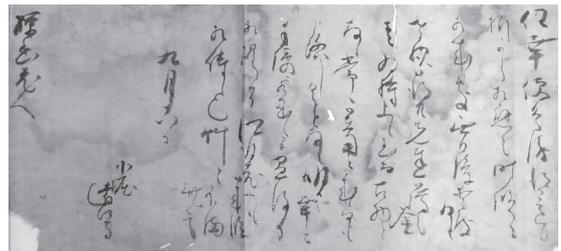
六通目は縦 19.4cm×横 33.9cm である。

筆者である江月(天正二年: 1574~寛永二十  
年: 1643)は, 桃山・江戸初期の茶僧で, 和泉  
堺の人である。諱は宗玩, 字は江月, 缺伸子,  
憎袋子, 赫々子などと号した。9 歳で京都の大  
徳寺に入り, 堺の南宗寺に転出したが, さらに,  
大徳寺の第 157 世, 筑前の崇福寺の第 79  
世, 南宗寺の第 13 世をそれぞれ住持するとい  
う経歴を持つ。茶を父と小堀遠州に学んで奥儀を極め, その筆に成る書画は今日も茶人の間  
にすこぶる珍重されている。



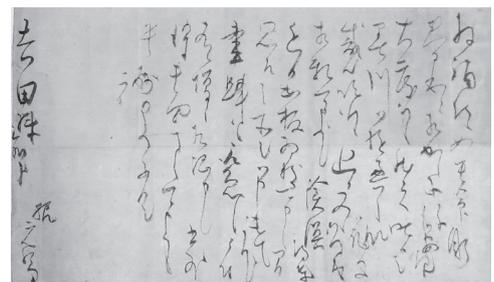
七通目は縦 18.6cm×横 41cm である。

筆者である小堀遠州(天正七年: 1579~  
天保四年: 1647)は, 近江国坂田郡小堀邑  
に生まれた。名は政一, 字は作助, 法号を  
大有また宗甫と称し, 庵を孤蓬庵, 転合庵  
と名づけた。普請奉行であった父と居住  
し, はじめ豊臣秀吉, のち徳川家康に仕え  
た。慶長九年(1604) 26 歳で父の遺領で



あった備中松山の城主となった。慶長十一年皇居造営の奉行を命ぜられ, 十三年駿府造営の  
奉行となり, 功により従五位下に叙せられ遠江守に任ぜられた。遠州と称したのはこのため  
である。書は松花堂昭乗に習ったと言われている。

八通目は縦 22.3cm×横 37.8cm である。署名  
が「服元喬」と見えることから, 筆者は服部南  
郭ではないかと推測される。服部南郭(天和三  
年: 1683~宝暦九年: 1683)は, 名は元喬, 字  
は子遷, 通称を小右衛門, 南郭または芙蓉館と  
はその号である。書は草書を得意とし, 落款に  
は「服元喬」と記すことが多い。



〈日高〉

補遺11 <sup>ひいん おしやうげ</sup> 費隱和尚偈

クE160  
クE182

軸箱には、「費  
隱和尚偈」と  
あり、横には「黄  
檗費隱大和尚」  
との題がある。

本軸の書者である費隱通容は、万曆二十一年（1593）に生まれ、順治十八年（1661）に示寂した明末清初の臨済宗天童派の禅僧で、隱元隆琦の師として知られる。道号が費隱、法諱を通容といい、俗姓は何氏で、福建省福州府福清県の人である。

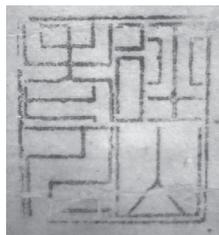
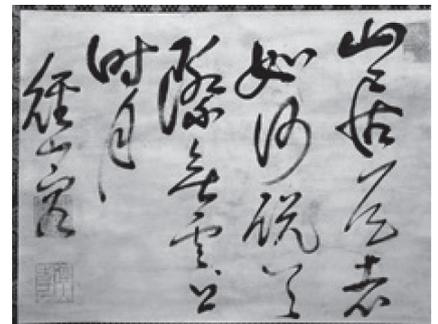
若い時に父母を亡くし、14歳で出家（三宝寺の慧山に就いた）し、崇禎三年（1630）に古黄檗山萬福寺において密雲円悟の法嗣（弟子）となり臨済宗の第31伝となったが、崇禎六年（1633）には密雲から萬福寺住持を継席。4年後には、隱元に源流と法衣を受けた。その後、各寺院を巡り、臨済の法を伝え、師の密雲と並称された。晩年は福巖寺に移り、世寿69を数えた。隱元を含め64人にも嗣法し多くの門弟を育てたといひ、密雲円悟が開いた臨済宗天童派の中で、費隱の門流だけが盛んとなっている。

禅林の乱れをくい止め嗣法伝承の正常化を目指す意図から史伝書『五灯嚴統』を編修、曹洞宗より臨済宗が優れていることを示した。しかし、曹洞宗との対立を生み、訴訟にまで発展し、敗訴。『五灯嚴統』の板木は焼毀処分となってしまう、費隱も径山興聖万寿寺を退出した。その後、三宜明孟とは和解し、径山住持として戻ることを許された。著述には、『祖庭鉗錘録』『心経斲輪解』などがある。

本軸の大きさは、縦141.5cm×横57.5cm。作品部分は、縦40.0cm×横52.6cmで、「山居道者/如何説天/際無雲上/時月/徑(徑)山容」と書かれている。引首印は、「臨済正宗第三十一世」（白文：縦5.3cm×横3.5cm）、落款印には、「費隱容」（白文：縦5.3cm×横4.8cm）と、「徑(徑)山老人」（朱文：縦5.3cm×横4.8cm）が押捺されている。

その書は、古格を備えたもので、筆先を紙上に食い込ませながら自在に各文字を縦横に展開させる書技には目を見張るものがある。

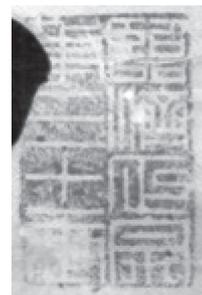
なお、費隱通容に関する詳細な研究には、陳垣『清初僧諍記』（野口善敬訳註、中国書店）、大槻幹郎編『黄檗文化人名辞典』（1988年、思文閣出版）、林觀潮「費隱通容『五燈嚴統』についての考察」（『花園大学国際禅学研究所論叢』）所載、2008年、花園大学国際禅学研究所）などがある。



落款印  
（徑山老人）



落款印  
（費隱容）



引首印  
（臨済正宗第三十一世）

（福元）

## 補遺12 もくあんしょうとういちぎょうしよ 木庵性瑠一行書

元番号なし

「達磨大師 臨濟三十三世黄檗木庵書」

軸の大きさ：縦 189cm×横 40.7cm

紙本部分の大きさ：縦 110cm×横 26.5cm

引首印：「方外學（学）士」

（白文：縦 3.4cm×横 1.6cm）

落款印：「釋（釈）戒瑠印」【廻文】

（白文：縦 3.7cm×横 3.5cm）

「木盦氏」（朱文：縦 3.7cm×横 3.5cm）

本軸の筆者：木庵性瑠は、万曆三十九年二月三日（1611年3月16日）～貞享元年一月二十日（1684年3月6日）にかけて活躍した、臨濟宗黄檗派（黄檗宗）の僧侶で、俗姓は呉氏。福建省泉州府の晋江县に生まれ、勅諡号は、慧明国師といた。江戸時代の前期、明暦元年（1655）に明国から渡来した著名な禅僧である。

16歳で出家して開元寺の印明の門に入ったが、18歳で得度し、杭州や天童山などの地を歴参して、28歳の時には、金粟山の費隱通容（補遺11参照）に参禅した。そのもとで、維那にまでなったが、その後も、紹興や天台山等を遍歴した。

のち、1648年には、中国黄檗山に登り、隱元隆琦からその法を受けることとなった。1653年には太平寺の住持を即非如一に譲り、翌年、来日していた隱元に招かれて来日することとなり、長崎の福濟寺（ふくさいじ）の住持となった。

1660年には、摂津の普門寺に、1661年には、宇治の黄檗山萬福寺に入り、1664年9月4日、隱元の法席を継いだ。

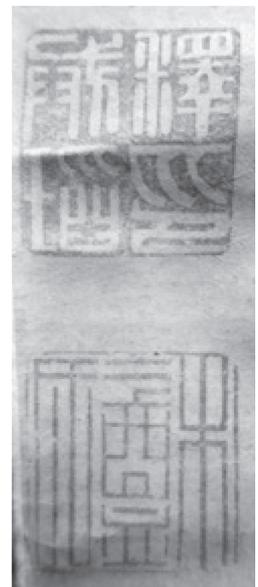
翌年、江戸にくだって、四代将軍徳川家綱に謁見を許され、江戸紫雲山瑞聖寺をはじめ十余寺を開創し、門下も50余人に及んだという。

1669年には、将軍より紫衣を賜ったが、1680年には、黄檗山の法席を、第3代の慧林性機に譲り、山内の紫雲院に隱退し、4年後に遷化。享年は74であった。

本作品にも見られるように、中国書法の基礎の上に、堂々と筆を揮っている。

当時から、能書家としても知られ、隱元、即非とともに「黄檗三筆」の一人に数えられる。隱元の書は「穩健高尚」、即非は「奔放闊達」な書と評されたが、木庵の書風は「雄健円成」という評価を得たものであった。

〈福元〉



上：引首印。  
右：落款印

補遺13 くさかべめいかく 日下部鳴鶴「克忠克孝」元番号なし  
額装

①日書 29 参照。

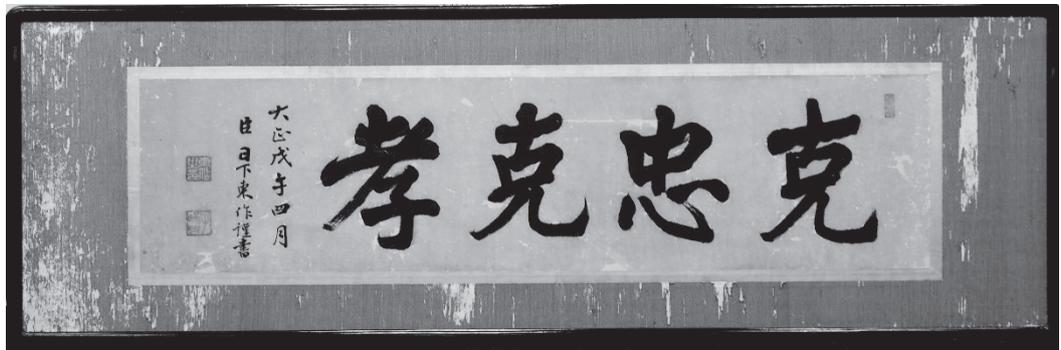
②かいわんしっ  
びつほう腕を大きく廻し、  
肘から先をほぼ  
水平に半月の形  
に張り出して運  
筆する方法。楊  
守敬が伝えた。

③日書 68 参照。

④日書 25 参照。

⑤きょういくち  
よくご正式には、「教  
育ニ関スル勅  
語」といい、明  
治天皇が国民に  
道德のあり方を  
語りかけたもの。

本額の筆者、日下部鳴鶴（1838～1922）は、田中惣右衛門の次男として八月十八日に江戸の藩邸に生まれた。初名は八十八、三郎、後に東作と改められた。字は子陽。明治六十七年頃より翠雨となり、その後鳴鶴と改められ、晩年には野鶴・老鶴などの別号を用いた。明治十二年、大書記官の要職を辞して、書道に専念し、同十三年、清国公使館随員であり、学者、政治家、書家でもある楊守敬<sup>①</sup>の門をたたいた。廻腕執筆法<sup>②</sup>による用筆法はもとより、漢魏六朝の碑版法帖について命をかけて研究し、六朝風の新しい書風を展開した。当時、鳴鶴流と称して天下を風靡し、明治二十四年には中国に渡り、直接文人、墨客と交わり、大いに見聞を広め、鳴鶴の書が確立していった。門弟は三千人にも及び、日本書道界に新風を吹き込み、書道教育界にも大きな潮流として脚光を浴びた。中林梧竹<sup>③</sup>、巖谷一六<sup>④</sup>と共に、明治の三筆と呼ばれる近代書道の確立者の一人である。大正十一年に85歳の天寿を全うした。

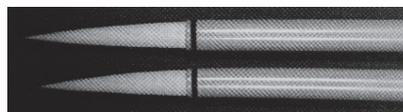


本額の大きさは、縦78cm×横237cm、紙本部分の大きさは、縦43.7cm×横177.2cmである。引首印は、「清遠間放（朱文）」（縦5.4cm×横2.2cm）、落款印は、「東作之印（白文）」（5.5cm角）、「子陽父（朱文）」（5.5cm角）が押捺されている。

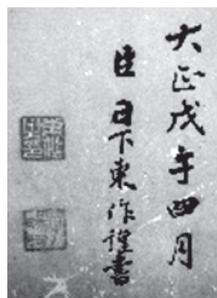
積文は以下の通りである。

克忠克孝 大正戊午四月 臣 日下東作謹書

教育勅語<sup>⑤</sup>「克ク忠ニ克ク孝ニ」の一節で、天皇に忠義を尽くし、親に孝行する意であり、当時の軍人たちも多く書している。鳴鶴80歳の書である。 〈山浦〉



鳴鶴用筆 長鋒羊毛筆  
（出典『現代書道の父 比田井天来』）



廻腕執筆法  
（出典『現代書道の父比田井天来』）



晩年の日下部鳴鶴  
（出典『鳴鶴先生叢話』）

## 補遺14 くさかべめいかく 日下部鳴鶴「惟信惟義」

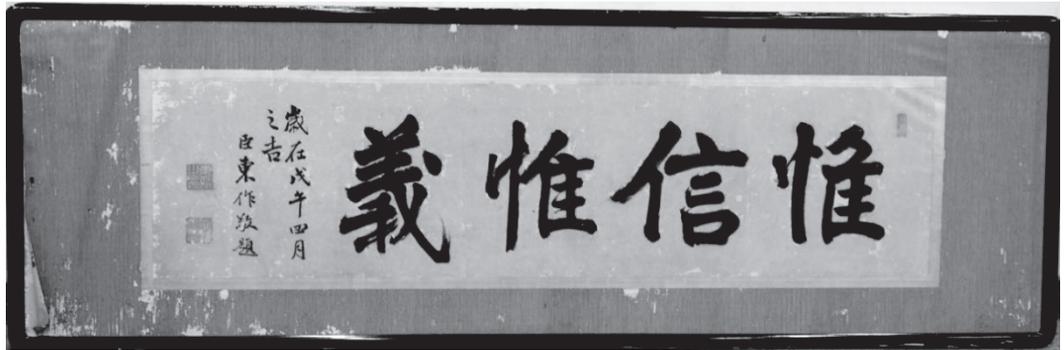
元番号なし  
額装

①補遺2参照。

②ぼしんしょう  
しよ

1908年に発布された明治天皇の詔書の通称。日露戦争後の社会的混乱の中、天皇制国家における国民道徳の方向を示したものの。

本所蔵品は、日下部鳴鶴の書である。人物については、補遺13を参照していただきたい。本額の大きさは、縦78cm×横237cm、紙本部分の大きさは、縦43.7cm×横177.2cmで、引首印は、「清遠間放（朱文）」（縦5.4cm×横2.2cm）、落款印は、「東作之印（白文）」（5.5cm角）、「子陽父（朱文）」（5.5cm角）が押捺されている。

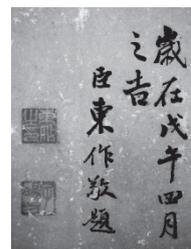


積文は以下の通りである。

惟信惟義 歳在戊午四月之吉 臣 東作敬題

本額は、小倉師範学校<sup>①</sup>の講堂正面の左右に、補遺13の額と合わせて展示されていた。これらの大額は、東寮解散の際の積み立て基金で書いてもらったもので、四文字の扁額でありながら、変化に富み、細部にまで魂が宿った書きぶりは鑑るものを魅了してやまなかったであろう。金地の表装が輝いており、その強い印象は、講堂の象徴ともいえるまでの存在感を放ち、当時の学生たちは講義そっちのけで見入っていたようである。また、応接室の壁面には、堀井鶴畔や国武鶴南などの条幅作品が、書道教室には、前後に西川萱南の額が掛けられており、学生たちはその見事な出来栄えに崇高さを感じていた。

日露戦争後、帝国主義の確立段階に突入した日本には、欧米諸国に伍する飛躍的發展という国家的至上課題があった。しかし、日本はこの国家的課題を前に、国家経済の窮乏化と階級対立の顕在化という2つの難題を抱えていた。その難題に対応するために発布された戊申詔書<sup>②</sup>では国民が日常的に励行すべき徳目を7つ挙げている。それは、「忠実服業」、「勤儉治産」、「去華就実」、「自彊不息」という4つの徳目と、「惟信惟義」、「荒怠相誡」、「醇厚成俗」という3つの徳目の、2種類に分類できる（小林 1981: 85）。前者の4徳目の共通点は、日常的な生産活動に関連するという点にある。国民に、奢侈の戒めを説き、重税に耐えうるひたむきな生産活動を求めているのである。後者の3徳目の共通点は、階級的調和を意図している点にある。つまり、戊申詔書は、国民の個人主義・享樂的傾向の是正を論じ、国民に勤勞と質素儉約を求めたものであった。このように日本の支配層は、「道徳と経済の調和」という報徳思想の考え方を用いて、国家経済の窮乏化と階級対立の顕在化という2つの難題を対処しようとしたのである。（三ッ石 行宏 「地方改良運動期における老人慰問・老人招待活動に関する一考察（1）」『社会問題研究』2010, 59, P.147-159引用）  
〈山浦〉



補遺15 蘇東坡書表忠觀碑

(上下二冊)

イ J146  
へ B144

イ J147  
へ B145

①そしよく  
(1037~1101)

字は子瞻、東坡居士と号した。蘇洵の長子、弟は蘇轍で、唐宋散文八大家の一人に挙げられる。

②この表忠觀碑に、醉翁亭記、豊樂亭記、羅池廟詩碑を加えた四碑をいう。

③らちびょうしひ  
三蘇祠にある該碑は清の康熙年間 (1705) に、金一鳳が刻したものの。

この「表忠觀碑」は、北宋の著名な文学者・書法家として知られる蘇軾 (東坡)①が、撰文・書丹した大字楷書碑であり、顔真卿の書から一步脱胎した風格の書である。本学所蔵のものはその剪装本であり、1頁、行3字、2行仕立の上下二冊である。上冊は、全78頁で、帖の大きさは、縦37.5cm×横26.7cm。採拓部分の大きさは、縦33.5cm×横25.5cm。また、下冊は全71頁 (帖の大きさは：縦37.5cm×横26.7cm。拓部分：縦33.5cm×横25.5cm) で、帖末の5頁分は、細字 (行13文字、30行) となっている。

ところで、この原碑は、宋の元豐元年 (1078) 八月に、杭州錢塘の錢氏の墓地に建てられた四石の両面刻 (計、八面) で、それぞれの面は、6行、行20字。総字数850字という、蘇東坡四大楷書名碑②中の長編で、蘇軾中年 (43歳) の代表作である。この宋刻本と、明の嘉靖三十九年に知府 (地方行政官) の陳柯が重刻した明刻本がある (残石は杭州市文廟内の碑林に現存。四川省眉山県の三蘇祠には残拓を集めて刻した完製の石碑がある) が、明の王世貞はこの書について「蘇文忠公撰並書、結法不能如『羅池』老筆、亦自婉潤可愛。銘詞是蘇詩之佳者。」といい、老筆 (60歳位の書) の羅池廟詩碑③の書格には及ばないものの、その詞文を良しとし、蘇軾の書碑の代表作に挙げている。また、頼山陽もこの詞文について「此篇蘇文の中に在りて、別にこれ一種の出色」と賞している (『新訳文章軌範』383頁)。

〈福元〉



(上冊)



(下冊)



早稲田大学所蔵拓片



「壹讀」掲載、明陳柯刻本拓

## 補遺16 魏高貞碑原石旧拓剪装本

クE230

①はくひのしよ  
ほう

『書道全集』  
第六卷

②ほうじゃく  
(1869～1954)  
浙江定海の人、  
字は葯雨、葯雨  
と号した。金石  
篆刻に精しく、  
収蔵に富んだ。  
著に『校碑随筆』  
七巻のほか、『言  
銭別録』一卷補  
一卷等がある。

高貞碑は、高貞没後9年の正光四年（523）六月に建設された頌徳碑である。正式には「魏故龍驤將軍營州刺史高使君懿侯碑銘」という。高貞（489～514）は、碑文によると渤海の脩（現在の德州）の人、字は羽真。26歳で早世した。

碑石は、約230×90×20cm。正書24行・行46字、篆額陽文4行12字。趺はなく、碑身の縦中央に深さ3cm、幅5cm程の溝が掘られているという。碑陰に、孫星衍の手になる泰山刻石29字の鈎摹が刻されており、現在は山東省文物考古研究所に保管されている。

清の嘉慶11年（1806）山東德州から出土したもので、北魏「高慶碑」・東魏「高湛墓誌」とともに、山東德州高氏家塾から出土した三碑誌を「德州三高碑」という。高貞碑は「高慶碑」と同手に出ずるものと考えられる。また、高氏は山東渤海の一大豪族で、皇室の外戚になる名門であったため、撰文者・筆者は不明であるが、当時の一流の者が当たったと考えられる。

中田勇次郎氏は「北碑の書法」①において、

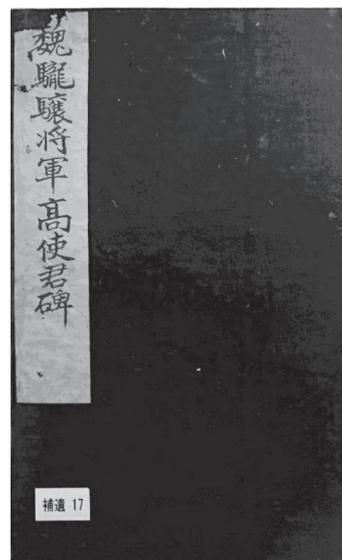
これは天然と工夫について見るならば、天然よりも工夫、精神よりも技巧においてすぐれているものといえる。字形は方正できわめてよくととのっている。《中略》文字の構成にも一定の規矩を備えていて、いささかのくろいもなく、扁旁の組み合わせの緊密さにおいても、すこしのすきまもない。間架結構の厳正さにおいてある一つの極點に達した感がある。

と高貞碑について述べている。北魏時代を代表する書風で文字の変遷においても重要な文字資料である。

また、方若②の『校碑随筆』には、初出土の拓本は、第八行下方の「英華於王許」の於字、王字が完好、これに次ぐものは於字の末筆泐し、しかも王字の首なお完好であり、今は王字泐して第二画に及ぶとある。

本拓は於字・王字ともに完好でないため、初出土の拓本とは異なるが、蟬翼拓で高貞碑の筆意を詳細に見て取ることが出来る精拓と言える。

本拓は、帙入りで、「南陽堂書房18万円」の価格票有。帖の大きさは縦31.0cm×横18.8cm。厚さは、1.8cm。拓部分は、縦24.5cm×横14.0cmで、一頁行7文字、4行仕立、全35頁である。〈吉村〉



【冒頭部分】



【於・王字部分】

補遺17 <sup>とうさんぞうしやうぎやうじよ ひ</sup> 唐三蔵聖教序碑 <sup>どうしゅうしやうぎやうじよ ひ</sup> (同州聖教序碑)

クE231

①ちよすいりよ  
う

(596~658)

浙江杭州銭塘の人で、字は登善。文史を博渉して文詞をよくし、楷隸に長じた。河南郡公に封じられたことから、「褚河南」とも称される。虞世南・歐陽詢と並び、初唐の三大家に数えられる。

②がんとしよ  
うきやうじよ  
唐の永徽四年  
(653)の刻。褚遂良書、万文韶刻。陝西省長安の慈恩寺大雁塔の左右に嵌入されたもので「慈恩寺聖教序」ともいう。褚遂良晩年の57歳の書。

唐の褚遂良<sup>①</sup>の書。陝西省同州大荔に現存する。龍朔三年(663)の刻。龍朔三年は褚遂良が愛州で他界して5年後にあたる。かつて褚遂良が刺史であった同州の人々がその遺徳をしのいで立碑したものであろうと考えられる。

荒金大琳氏が、別府大学紀要『雁塔聖教序から生まれた同州聖教序』において、

雁塔聖教序<sup>②</sup>に見られる修正線が同州聖教序にも多数見られることにより、同州聖教序は雁塔聖教序の拓本を利用して作成したことがわかった。しかし、100%そのままの複製ではなく、拓本を利用して、前後の文字と入れ替えなどの工夫を加えながらの作成である。と述べている通り、同州聖教序は雁塔聖教序の複製と考えられる。

褚遂良の代表作である雁塔聖教序は序碑と序記碑から成る。両碑ともに褚遂良の書で、大雁塔での配置は左に序碑、右に序記碑となる。また、本文は序碑が右から左、序記碑が左から右へ移行するよう両碑が左右対称になるよう意図されている。これに対し、同州聖教序は、雁塔聖教序両文(序碑・序記碑)が一つの碑石に刻されており、本文は右から左へ移行する。以下の図版のように末尾の署名が異なるため文字数も異なる。

孫退谷は「同州は骨を豊かにし、慈恩(雁塔)は韻をゆたかにして、両手を出したるが如し。同州もつとも墜石驚雷の勢あり」と述べている。

褚遂良書の作品といえる貴重な資料である。

本帖の大きさは、縦31.0cm×横19.8cm。拓部分は、縦25cm×横14cm。

1頁、行7文字、4行仕立。本文52頁。

印は、1頁上「澤培印信(白文)」(縦2.7cm×横3.0cm)、1頁下「白澤培(朱文)」(1.2cm角)、2頁「白澤培(朱文)」(0.9cm角)、「南陽堂書房四万五千円」の価格票有り。

〈吉村〉



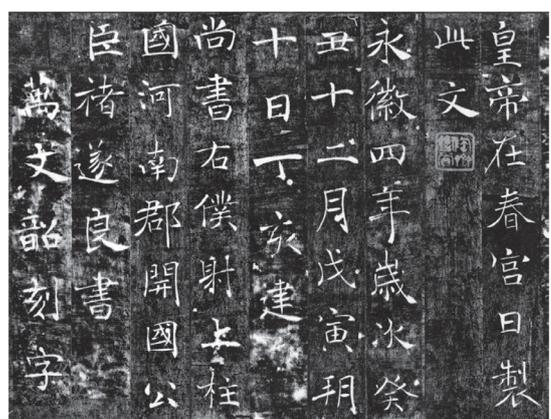
【同州聖教序・冒頭部分】



【雁塔聖教序・冒頭部分】



【同州聖教序・末尾部分】



【雁塔聖教序・末尾部分】

補遺18 とうふうほん きこう ひせんそうほん 唐馮本紀孝碑剪装本

元番号なし

楊昭儁（潜庵）  
旧蔵本①ぜんとうぶん  
中国の唐，五代  
の散文の総集。  
1000巻。

筆者の閻朝隱（生没年不詳）は，唐時代の文化人・政治家。字は友情。若くして兄の閻鏡幾や弟の閻仙舟とともに名を知られ，孝悌廉讓科に相次いで及第し，陽武県尉に任じられた。進士。

本拓の表題の「唐馮本紀孝碑」，「大唐故亳州録事參軍事上騎都尉馮府君紀孝之碑」の籠字篆文，また，跋文ともに楊昭儁筆。楊昭儁は湖南湘潭の人。字は潜庵。清時代の書家，篆刻家。

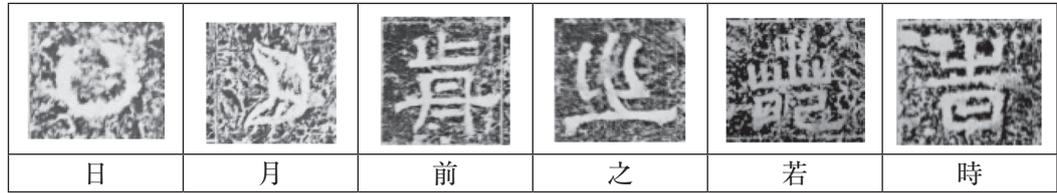
以下，积文（山西教育出版社『全唐文<sup>①</sup>（貳）』を参考に加筆・修正）を記載する。改行を「/」，未読解文字を「□」，加筆修正部分を太字で示す。

大唐故亳州録事參軍事上騎都尉馮府君紀孝之碑 / 正義大□□□□書 / 少□□□朝隱撰 / □□□□慎非鐫字 / 夫元亨利貞開物之 / 綱鍵也典謨訓誥設 / 範之源流也變通周 / 於三古而□□其情 / 浸潤洽於九區而人 / 乘其利□□之播歲 / 探其微如笙之折日 / 取其半萬代而不盡 / 府君之道歟

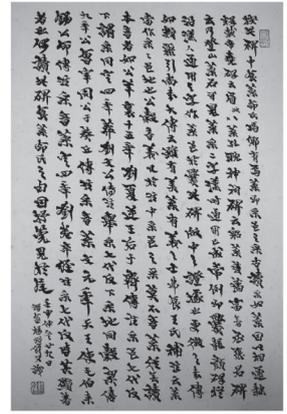
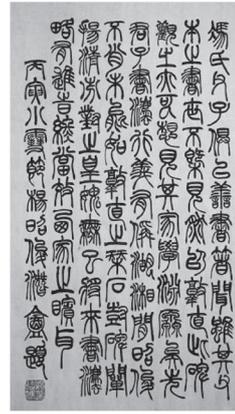
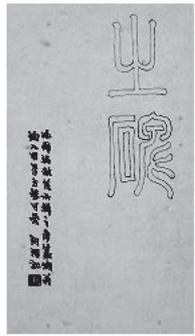
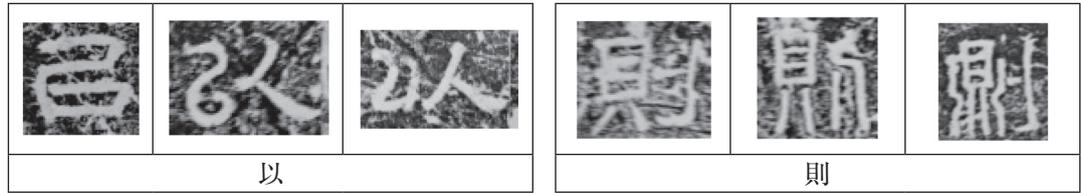
府君 / 諱本字□□長樂信 / 都人也周之爲主天 / 子授以丕基晋則有 / 人丞相登其龍渥自 / 後衣冠代起組綬駢 / 驅邦家必聞出幽都 / 而獨秀名教可樂入 / 魏國而先鳴 曾祖□後魏外兵參軍北 / 地郡丞昂藏絕群耿 / 介負俗其功可立思 / 與主而吁噓其道不 / 行視危邦而傲睨 / 祖悅字文朝驃騎將 / 軍定安□郎中令與 / 隋文帝有舊辟命不 / 出去病以威名動俗 / 昇之驃騎雍齒以故 / 舊生鬻封以什方國 / 歩重清出爲嘉州峨 / 嵎縣令仁恩浹於旋 / 靶信義流於闔棺 / 父賢隋校書郎國初 / 率子弟應接義旗加 / 通議大夫檢校定州 / 北平縣令蒼疋篆籀 / 之指歸陰陽數術之 / 城府莫不備窮制造 / 妙盡精微建功則與 / 天會留委質□□□ / □□□重規杳矩驥 / □鵬飛爲珠則漢水 / 聯華爲玉則崑山動 / 色 公波瀾萬仞節 / 目千丈□衣壁水見 / 科斗之爲文鼓□□ / □□□□成字草 / 隸斯盡筋骨備存或 / 取以龜圖或詳諸鳥 / 跡或理窮玄妙或思 / 盡豪芒以之象形類 / 脫於前載以之會意 / □□□□□□□□ / □解褐利州參軍陟 / 綿州參軍頻丁憂去職結廬在墓負土成 / 墳父兮母兮鞠我育 / 我取敬取愛以尊以 / 嚴事□□□□□□ / □□茶蓼陟岵岵而 / 不見行碎肝□僅全 / 毀滅之中重起簪裾 / 之內服闋遷淄州錄 / 事□乾封中入計 / 上臨軒問□□□□ / □□□□王是臨 / 奇獸不入九十百衆 / 日月歲資艸枯盡有 / 爲之門倉坵虛不急 / 之事□□廩壹粒積 / 成九稔之儲露□□ / □□□□□之產 / 陛下以損爲未損微 / 臣以安爲未安爰下 / 天書載牧垌澤有犯 / 無隱皆□□也尋擢 / 亳州録事參軍如□ / □□□□□□□□ / 如網提綱得鳥期於 / 一目功無所蔽過無 / 所容巡察使以清白 / 聞秩未進於□□名 / 已登於岱錄以咸享 / 四年□□□□□□ / □官春秋六十有四 / 人吏傷心仰徽容其 / 若疚友朋交臂顧支 / 體其如失 / 夫人恒農楊氏繼夫 / 人上□□□□□□ / □□□交接爲國則 / 土宇齊封陽數奇陰 / 數偶以久視元年五 / 月廿二日合祔於 / 先塋禮也嗣子銀青 / 光祿大夫□□□□ / □□□留直昭文館 / 敦直曾與至孝閔□ / 醇心公才備於四科 / 帝獎隆於三篋若韋 / 之銘寶器若李斯之 / 篆銅人挺生間起角 / 立傑出兼張華之 / 博物若孔光之深慎 / 剖析疑滯則明鏡見 / 膽鎔裁得失則利劍 / 吹毛□□劬勞未盡 / 罔極之報匍匐感咽 / 庶祈不朽之文朝 / 隱竹簡舊遊蓬山遺 / 老有企無愧考行直 / 書迺銘其言俾刻於 / 石冀東西南北夫子 / 之墳焉其辭曰 瓜 / 廕縣縣系於周年畢 / 公是出畢萬是遷 / 仕晋何代封魏何年 / 食菜命氏馮鄉有焉 / 符運代起水火更王 / □燕稱孤入魏爲相 / 士流模楷名教宗匠 / 冠冕搢紳允歸時 / 望光光郡丞挺生其 / 後昂藏獨得耿介自 / 守辭疾丘園養高林 / 藪雖即千駟非義不 / 受赫赫驃騎聲雄五 / 都盈尺美玉徑寸明 / 珠盧綰即舊雍齒何 / 辜或出或處與時並 / 驅爰降異靈是生良 / 宰陰陽數術篆籀文 / 彩橋鸞未振潜龍有 / 待以忠事君其跡斯 / 在鳳凰有鷁□□ / 有駒鷁鳴鏘鏘駒行 / 昂昂登□胄子擢於 / 上庠參卿軍事其道 / 逾光盡節匡時受命 / 河洛典茲刺舉繩違 / 景毫物情刻刑代 / 務□□無謂我固藏 / 舟於壑哀哀嗣子揣 / 揣餘生孝友成性忠 / 貞令名通於天地感 / 於神明冀搖雄筆以 / 紀頌聲千秋萬歲 / 灌木豐草子孫盈門 / 軒車□道或青或紫 / 以拜以掃披其遺文 / 與天同老 / 嫡子銀青光祿大夫 / 留直昭文□□□國 / 長樂□開□男敦□ / 書先天元年歲次□ / 子十一月景寅朔□ / □□申討

書体は隸書であるが、篆書の骨格で書かれている文字も見られる。また、文字によっては、同字で字体を変えて書かれているものもある。先天元年（712年）の記年有り。

【篆書の骨格で書かれているもの】



【同字で字体を変えて書かれているもの】



本帖の大きさは、縦 39.0cm×横 24.0cm、厚さ 2cm。拓部分は、縦 28.0cm×横 18.0cm。一頁行 8 文字 5 行仕立て、本文全 35 頁。

印は、表紙題紙「昭僞（白文）」／本文 1 頁上「潜盒（朱文）」・下「楊昭僞印（白文）」／33 頁「浄楽宦蔵（朱文）」／跋文「楊昭僞印（白文）」・「美不老斎（朱文）」・「楊昭僞（白文）」である。

（吉村）

## 補遺19 がんろこうさんひょうしんせきたくちょう 顔魯公三表真蹟拓帖

クE37

クE34

①さんこう

顔真卿書『争坐位稿』『祭姪稿』『祭伯稿』の総称。『争坐位稿』唐の広徳二年(764)十一月、顔真卿が右僕射の郭英乂に宛てた書簡の草稿。『祭姪稿』唐の乾元元年(758年)九月、安祿山の変で犠牲となった従兄の息季明を祭った弔辞の草稿。『祭伯稿』唐の乾元元年(758年)十月、伯父顔元孫及び一門の物故者を祭った時の祭文の草稿。

顔魯公は臨沂の人で名は真卿、字は清臣。幼少期より文学に通じ、26歳で官吏に登用され、77歳の時に太子少師を務めた。

三表とは、謝贈華州刺史表・謝兼御史大夫表・讓憲部尚書表を指す。清朝時代に包祥高氏がこの三表を得てそれを奇なりとして刻したものとされる。いずれも顔真卿の上奉文である。

謝贈華州刺史は一名謝贈祖官表ともいわれるもので、乾元元年(758年)四月、顔真卿50歳の時の書。四月に朝廷より祖先にあたる昭甫に華州刺史を贈った時のもの。謝兼御史大夫は、至徳二載(757年)六月、顔真卿49歳の時の書。御史大夫を加えられた時の上奉文。讓憲部尚書は、至徳二載四月、顔真卿49歳の時の書で、いずれも三稿<sup>①</sup>より以前に書かれたものである。

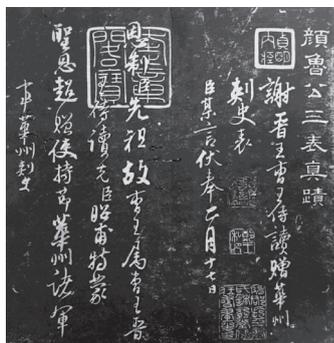
以下、相浦知男氏『顔魯公之研究』より抄録する。

即ちこの刻本には明朝時代の印が多数押されてゐるのであるから、實からいへば明時代に発見されてゐるものであり、明時代の何かの記録に書きとゞめられてゐる筈であるがこれがない。そして偶然これが清時代に発見せられたといふのは不思議である。一方民間の貧しい、何も分からぬものゝ手にあつて、これが宋明と時代を過たのであるか、又は具眼の士に見出されることが出来なかつたのだと云い終ればそれまでのことであり、眞蹟としても差支ないであらうけれども仲々そう簡単に片づけるわけにもいくまい。

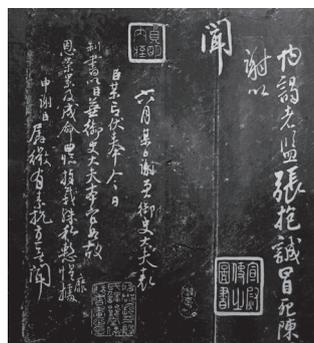
とあり、眞蹟であるかは不明である。また、

公の書は純心であるといふが、この帖等の如きものはその代表作ともいふべきもので、如何にも豊かな場面が見られ學習のし易いものである。《中略》顔法を知るものとしてこの三表位は知つておかなければならぬが、案外知つてゐる人は少なく、その常識の足らないのには驚くより外はない。この三表は三稿と共に記憶すべきものゝ一つである。

と結ぶ。顔真卿若書きの行書として貴重な資料である。



謝贈華州刺史表



謝兼御史大夫表



讓憲部尚書表

本拓帖の大きさは、縦 33.0cm×横 16.0cm、全 32 頁。

拓部分は、縦 33.0cm×横 500.0cm。

印(一頁目)は、2.5cm 角。印文は、「□□文庫図書之印」(朱文)である。

〈吉村〉



主要参考文献一覧（\*本文中に記載した文献については、一部省略した。）

書名	編者又は著者名	出版社
『国史大辞典』	国史大辞典編集委員会	吉川弘文館
『日本歴史大辞典』	日本歴史大辞典編集委員会	河出書房新書
『書道辞典 増補版』		二玄社編集部
『書家 101』	石川九楊 加藤堆繫	新書館
『富陵の書流』	「富陵の書流」編集委員会	日栄プリント社
『鳴鶴先生叢話』	井原録之助	昭文堂
『明治書道史夜話』	近藤高史	芸術新聞社
『現代書道の父 比田井天来』	天来書院	天来書院
『亀井南冥昭陽全集 第一巻』	同全集刊行会	葦書房
『亀井南冥昭陽全集 第八巻・上』	同全集刊行会	葦書房
『儒俠亀井南冥』	高野江基太郎	共文社
『亀井南冥・亀井昭陽』	荒木見悟	明德出版社
『經書大講 第八巻』	小林一郎	平凡社
『日本の書 維新～昭和初期』	成田山書道美術館	二玄社
『ミネルヴァ日本評伝選 橋本関雪 一師とするものは支那の自然一』	西原大輔	ミネルヴァ書房
『〈異郷〉としての大連・上海・台北』	和田博文 黄翠娥	勉誠出版
『関西モダニズム再考』	竹村民郎 鈴木貞美	思文閣出版
『新潮 世界美術辞典』	佐藤亮一	新潮社
『書道全集 第22巻』	下中邦彦	平凡社
『易経 下』	今井宇三郎 堀池信夫 間嶋潤一	明治書院
『雲華上人遺稿』	赤松文二郎	後凋閣
『広瀬旭荘全集』	岡村繁 井上敏幸	思文閣
『朝日日本歴史人物事典』	朝日新聞社	講談社
『広瀬淡窓, 広瀬旭荘』	岡村繁	岩波書店
『第二版 中国書道辞典』	中西慶爾	木耳社
『日本・中国・朝鮮／書道史年表事典』	書学書道史学会	萱原書房
『中国法書選 24 高貞碑』		二玄社

